

下 沢 遺 跡 I

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成24年 3 月

彦根市教育委員会



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（北東から）

巻頭図版 2



1 SZ01方形周溝墓 南から



2 SZ01方形周溝墓西溝 土器出土状態 南から

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、民間の宅地造成工事に伴い、平成23年4月26日から平成23年6月30日にかけて実施した、下沢遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。整理調査については、平成23年7月1日から平成24年3月15日にかけて行った。

2. 本調査の調査地は、彦根市西沼波町字本ノ前328番の一部に位置する。

3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

教育長：前川 恒廣

文化財部長：谷口 徹

文化財部次長（兼文化財課長）：上田博司

課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦

史跡整備係長：北川恭子

副主査：池田隼人

主任：深谷 覚

主任：森下雅子

主任：辻 嘉光

主任：林 昭男

主任：三尾次郎

技師：戸塚洋輔

技師：田中良輔

技師：下高大輔

臨時職員：佃 昌幸

4. 現地調査・整理調査は戸塚が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：片山正範 川上俊水 辻 節夫 友田 勇 浜野 勲（作業員）

久保亮二（調査補助員）

大西 遼 檜木規秀 片山悠太 仲田周平 八木宏明（滋賀県立大学学生）

整理調査：北森 光 砂田恭平 八木宏明（滋賀県立大学学生）

5. 本書で使用した遺構実測図は、久保亮二、大西 遼、片山悠太、仲田周平、八木宏明、戸塚が作成し、遺物実測図及び拓本については、佃 昌幸、八木宏明、戸塚が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、調査担当者が行った。

6. 本書の作成にあたり、以下の方々からの助言・協力を得た。

伊庭 功 近藤 広 久田正弘

7. 本書の執筆及び編集は、戸塚洋輔が行った。

8. 本書で使用した方位は、真北を示し、標高は東京湾平均海面に基づく。

9. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

10. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。

土師器  須恵器  陶器  磁器 

目 次

卷頭図版

例言

第1章 序 論

- 1 調査の経緯と経過 ————— 1
- 2 地理的・歴史的環境 ————— 1
 - (1) 地理的環境 ————— 1
 - (2) 歴史的環境 ————— 3

第2章 調査成果

- 1 基本層位 ————— 6
- 2 弥生時代前期 ————— 6
 - (1) 土器棺墓 ————— 6
 - (2) その他出土遺物 ————— 8
 - (3) 小 結 ————— 8
- 3 弥生時代終末期～古墳時代初頭 ————— 10
 - (1) 概 要 ————— 10
 - (2) 方形周溝墓 ————— 10
 - (3) その他の遺構と遺物 ————— 20
 - (4) 小 結 ————— 20
- 4 奈良時代以降 ————— 21
 - (1) 概 要 ————— 21
 - (2) 掘立柱建物 ————— 22
 - (3) 出土遺物 ————— 22
 - (4) 小 結 ————— 22

第3章 総 括

- 1 下沢遺跡の方形周溝墓と出土土器について ————— 24
- 2 芹川・犬上川流域における下沢遺跡の位置 ————— 28

出土遺物観察表

図版

報告書抄録

第1章 序 論

1 調査の経緯と経過

下沢遺跡は彦根市西沼波町に位置し、本発掘調査としては今回の調査が1次調査となる。1次調査区は、西沼波町字本ノ前328番の一部に含まれる。調査地は、国道8号線とJR東海道本線琵琶湖線の間、現在の芹川の北側にあたり、芹川によって形成された自然堤防の微高地上に立地している。調査地の周辺では、近年宅地開発が進み、調査地とその周囲の田地は宅地に囲まれている。今回の緊急発掘調査は、民間の宅地造成工事に先立ち提出された文化財保護法第93条の届出及び調査依頼にもとづくものである。平成23年3月23日、開発面積5,027.41㎡を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ16箇所を設定して試掘調査を行った。その結果、開発対象地の南東側では基盤層が安定せず、低地や自然流路となっており、遺構は確認されなかった。これに対し、開発対象地の西側では、トレンチ4箇所遺構と遺物を確認するにおよび、開発に先立ち発掘調査を実施する必要性が指摘された。

したがって、協議を経て、工事のために遺構の現状保存が不可能な道路敷と宅地の範囲を対象として本発掘調査を実施した。発掘調査は平成23年4月26日に着手し、平成23年6月30日に終了した。調査面積は430㎡である。表土を重機（バックホー）により除去した後、人力により遺構の検出・掘削を行った。湧水の激しい土地であることに加え、梅雨の季節で降水量も多く、排水作業が困難であった。遺構平面図の作成は、グリッドを基準に縮尺20分の1を基本に、適宜縮尺10分の1で人力によって行った。試掘調査の段階では、主に奈良・平安時代の遺構が存在すると推測していたが、本調査では、予想に反し、弥生時代終末期～古墳時代初頭の方形周溝墓域を確認するに至った。その後、平成23年7月1日～平成24年3月15日にかけて整理作業を行い、本報告書の刊行となった。

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

西沼波町は、犬上川の北を東西に流れる芹川の南北両岸にわたり、下沢遺跡は現在の芹川の右岸に位置する。彦根市域の平野は、芹川、犬上川、宇曾川、愛知川の四河川の洪水による堆積で形成されており、このうちの芹川は、最も北を流れ、扇状地を形成している。下沢遺跡は琵琶湖に近い氾濫平野に位置し、芹川によって形成された自然堤防の微高地上に立地する。彦根城下の南西を限る芹川は、江戸時代初頭の彦根城築城と城下町建設の際に付け替えられたと考えられており、本来の旧河道は現在の芹川の東海道線鉄橋付近から北西方向に向かって松原内湖に注いでいたと推定されている。下沢遺跡の1次調査区の東側では、試掘調査の結果によると、低地が広がっていることが知られ、自然流路の存在も推定できる。

こうした地形環境を示すように、この部分の小字名は「沢」とされている。なお、1次調査区は、小字名「本ノ前」の範囲に含まれている。このように、1次調査区は、芹川に沿っ

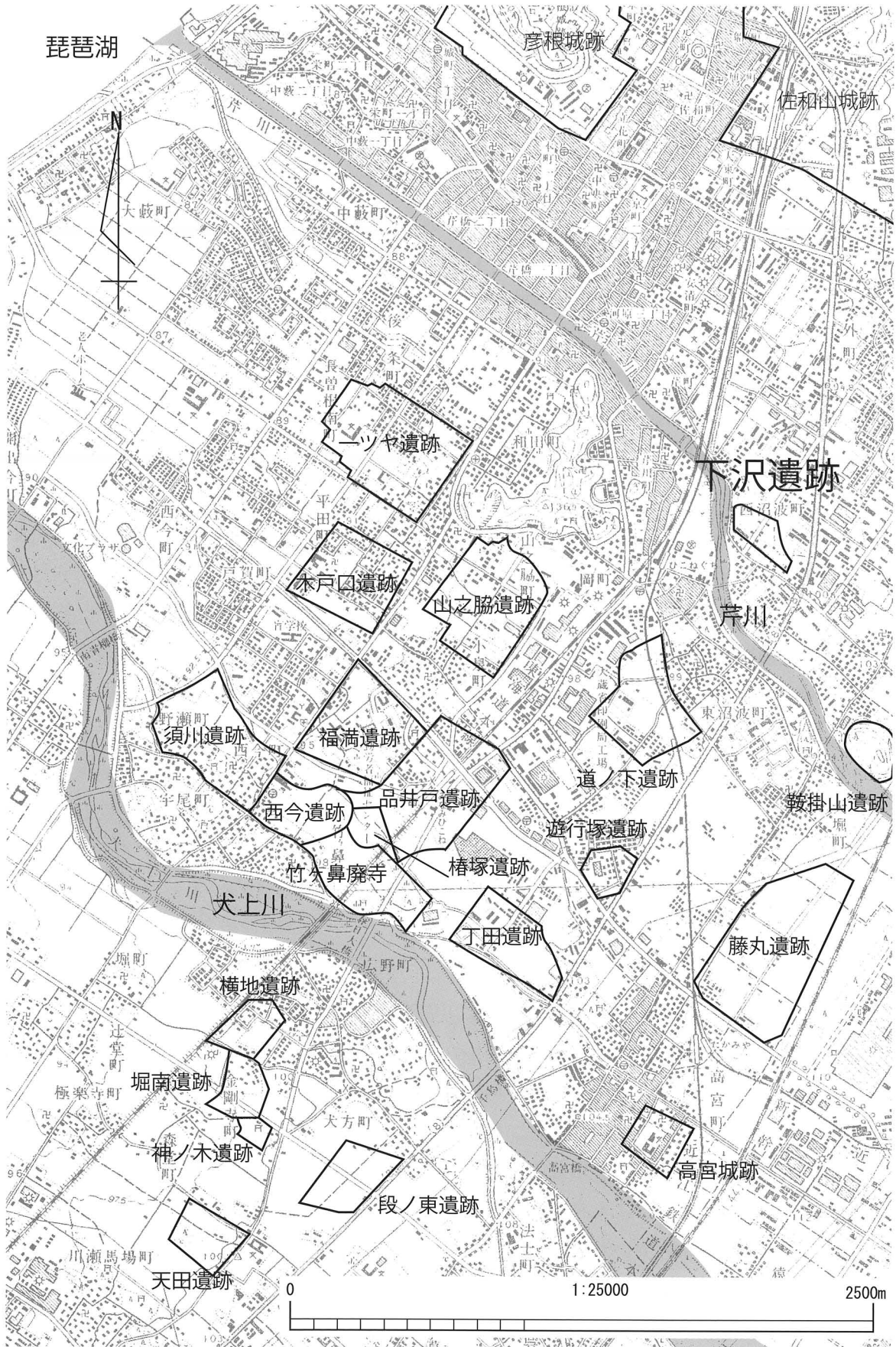


図1 下沢遺跡とその周辺の遺跡

た微高地の東側端部に位置している。しかし、自然流路に接する微高地の東端部に位置することから、湧水が顕著で、比較的安定しない土地であったであろう。

また、芹川の南を流れる犬上川は、堆積により彦根市域の平野部を形成し、滋賀県においても有数の扇状地地帯となっている。犬上川の源流は、遠く鈴鹿山脈の鈴ヶ岳から発し、彦根市一帯の湖東平野の東縁の山地は、標高300~400m程度のなだらかな山並である。また、犬上川流域では、河岸段丘を形成しながら、犬上郡多賀町の榑崎周辺を扇頂として西北方向に広がる扇状地が形成されている。扇状地の末端付近にはいくつもの湧水があり、下流の水田の重要な水源となっている。

(2) 歴史的環境

縄文時代 芹川の扇状地では、縄文時代晩期から遺跡がみられ、大岡遺跡では縄文時代晩期~弥生時代前期の土器が出土し、久徳遺跡では縄文時代晩期の土器棺墓が検出されている。また、犬上川流域で最も古い遺物は、福満遺跡から出土した縄文時代前期末の大歳山式



図2 調査区の位置

土器である。福満遺跡は、犬上川流域のなかでも琵琶湖に近い水の豊富な沖積地のなかの微高地上に位置する。縄文時代中期の様相は不明瞭であるが、縄文時代後期～晩期にかけては集落が展開する。福満遺跡の東に位置する丁田遺跡では、竪穴建物と埋設土器が検出され、中期末の集落の存在が明らかとなった。墓の可能性のある埋設土器の中からは、翡翠大珠が出土している。縄文時代の稀少な装身具である翡翠大珠は、北陸地方から流通したものと考えられ、湖東地域と北陸地方との関係や湖東地域の縄文社会を考えるうえで重要な遺物である。

弥生時代 弥生時代前期・中期の遺跡の様相は不明瞭で、右岸の竹ヶ鼻廃寺遺跡において弥生時代前期の土器が出土している程度である。一方、左岸の荒神山麓では、稲里遺跡で弥生時代前期の集落が、妙楽寺遺跡では弥生時代前期末～中期前半の集落が検出されている。川瀬馬場遺跡では、弥生時代中期中葉から後半の集落が検出されている。これらの遺跡は、扇状地の扇端より下流の氾濫平野など低湿地に位置している。

弥生・古墳移行期 弥生時代終末期には、福満遺跡、品井戸遺跡と対岸の堀南遺跡が知られ、その多くは、扇状地より湖岸側に位置する。福満遺跡では、集落と墓域がともに検出されており、弥生時代終末期～古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されている。品井戸遺跡と堀南遺跡においても、同様に方形周溝墓が検出されている。福満遺跡では、北陸系土器、S字状口縁台付甕を含む庄内式併行期の土器が出土し、北陸地方や濃尾平野と強い関係をもっていたことが想定される。芹川の扇状地の扇央部に位置する木曾遺跡では、庄内式併行期～布留式併行期の集落が営まれている。布留式期の竪穴建物の床面上からは、珠文鏡の破鏡が出土しており、注目できる。

古墳時代 古墳時代になると、前期末には、琵琶湖岸に近い荒神山丘陵の稜線上に荒神山古墳が築かれる。全長124mの前方後円墳で、大津市膳所茶臼山古墳とほぼ同形・同大である。膳所茶臼山古墳とともに、琵琶湖における水運を担った有力な被葬者が埋葬されたのであろう。古墳時代後期には、同じ荒神山丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする荒神山古墳群が築かれる。現在、30基以上の古墳が確認されている。荒神山王谷1号墳の横穴式石室の玄室は、やや寸詰まりのプランで、持ち送り技法によって構築され、天井石は一石である。ドーム状を呈し、渡来系氏族との関わりが強い。福満遺跡では、円圏文をもつ子持勾玉が出土しており、こうした子持勾玉は日本海側や韓半島においても出土していることから、韓半島と日本列島との交流を示す遺物として注目できる。これらの横穴式石室や子持勾玉からは、犬上川流域において渡来系氏族が定着した様子がうかがわれる。なお、福満遺跡の付近には、「椿塚」という藪があり、石室が発見されて須恵器が出土したと伝わり、古墳が存在した可能性が高い。芹川流域の木曾遺跡においても、渡来系氏族との関連が推定されている古墳時代後期の大壁造建物が検出されている。松原内湖遺跡では、須恵器と耳環を副葬した古墳時代後期の土壙墓が確認され、その東に南北に伸びる佐和山丘陵においても磯山の諸古墳、埋塚古墳、千代神社裏山古墳が確認され、時期の判明するものはいずれも後期古墳である。

奈良・平安時代 犬上川流域の白鳳寺院としては、高宮廃寺、竹ヶ鼻廃寺、八坂廃寺が知られる。高宮廃寺には、高宮町小字「遊行塚」に塚状の高まりがあり、それが鎌倉時代の遊行上人が建治3年（1277）に巡錫回向した遊行塚であったと伝わる。礎石もみつまっているが、塚状の高まりとともに現存しない。白鳳時代の瓦も出土し、古代寺院であったと考えられている。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺の南東には、畿内と東国を結ぶ交通路である東山道が位置していた。竹ヶ鼻廃寺遺跡では白鳳時代～奈良時代の瓦が出土し、白鳳時代以降の寺院跡と考えられている。奈良・平安時代になると、品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、福満遺跡、丁田遺跡、藤丸遺跡、法土南遺跡では、掘立柱建物跡と竪穴建物が検出されている。なかでも、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、奈良時代後半に寺院を廃して大型の掘立柱建物群や柵列が設置されており、円面硯や銅匙も出土し、犬上郡衙の有力な比定地とされている。東側に位置する品井戸遺跡では石帯が出土しており、竹ヶ鼻廃寺遺跡と品井戸遺跡は、古代の犬上郡において中心的な位置を占めていたものと考えられる。

鎌倉・室町時代 中世になると、犬上川の河口左岸に位置する八坂東遺跡では、12世紀前半～13世紀前半の掘立柱建物、井戸、溝が検出され、土師器、山茶碗、輸入陶磁器が出土している。八坂には八坂荘があり、琵琶湖を介した広域な商業活動が行われていたことがうかがわれる。荒神山の北東に位置する妙楽寺遺跡では、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、15世紀末～16世紀後半、16世紀末の各時期の遺構が検出されている。鎌倉時代～室町時代にかけては、掘立柱建物、井戸、溝で構成される集落である。15世紀末～16世紀末になると、条里に沿って道路と水路が縦横に整然と区画された地割りが顕著となり、掘立柱建物の立ち並ぶ屋敷地が形成される。一方、宇曾川の対岸、荒神山の麓に位置する古屋敷遺跡では、14世紀～16世紀中頃の遺構が検出されている。16世紀中頃には、石組溝と道路、土塁によって区画割りされ、掘立柱建物から成る屋敷地が形成される。妙楽寺遺跡と古屋敷遺跡では、ともに整然とした屋敷地がみられ、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄していた様子が明らかになっている。

第2章 調査成果

1 基本層位

下沢遺跡における基本層位としては、1～6層に分類できる。1層は、暗灰色粘質土で、近現代の水田耕作土である。2層は、これに伴う黄褐色粘質土の床土である。3層は明黄褐色土で、部分的に存在する現代の造成土である。

4層は灰色粘質土で、調査区全体にわたってみられ、15～20cm幅でほぼ水平に堆積している。7世紀～16世紀代の遺物が含まれ、12～13世紀の遺物が主体である。中世に堆積したものと考えられ、整地層の可能性もある。

5層は明灰色粘質土で、調査区東端の落ち込み部分でみられる。低地部の堆積層である。6層は黄褐色粘質土で、下沢遺跡の基盤層である。基盤面の標高は、95.4～95.6mである。調査区内で東に向かってしだいに低くなっており、調査区の中心から西側が高位面にあたる。

遺構検出は、基盤層である6層上面において行った。大半の遺構の埋土は、暗褐色粘質土で、時代による埋土の色調の違いはほとんどみられない。今回の調査では、弥生時代前期、弥生時代終末期～古墳時代初頭、平安時代～鎌倉時代の遺構を検出した。主な遺構としては、弥生時代終末期～古墳時代初頭の方形周溝墓群が挙げられる。ただし、中世の整地層の可能性もある4層がほぼ全体に存在し、古代の土器も出土しているため、古代から中世にかけての開発によりそれ以前の遺構は削平を受けているものと考えられる。また、小穴を多数検出したが、遺物が出土したのはSP01、SP02のみで、古式土師器の小破片が出土した。その他の小穴の時期は不明である。

2 弥生時代前期

(1) 土器棺墓 (図4)

弥生時代前期の遺構としては、土器棺墓 (SX01) が検出された。SX01は、方形周溝墓 SZ03の北東に位置し、時期不明の土坑 SK04にきられている。径75cm～83cmの楕円形の土坑内に壺1個体 (2) が斜位に据えられ、これとは別に鉢の口縁部片 (1) が壺の上部に接した状態で検出された。遺構の上部が削平を受けており、土器の残存状態は良好ではない。打ち欠きの有無は不明である。土坑の埋土は暗褐色粘質土で、壺内の埋土は灰色粘質土であった。壺の中からは長さ2cm程度のサヌカイト剥片 (3) が出土したが、混入した可能性が考えられる。土坑内に壺が据えられた状態が明らかで、鉢の口縁部が逆位で壺の上部に接しているため、壺を棺体とし、鉢を組み合わせた土器棺墓の可能性が高いと考えられる。

1は鉢の口縁部片で、弥生時代前期後半の柴山出村式、あるいはこれを模倣した土器であると考えられる。口縁部は波状を呈し、口縁端部内面及び外面には沈線と刺突文が施される。刺突は左側から右方向にかけて施されている。肩部には突起をもち、2つ残存している。突

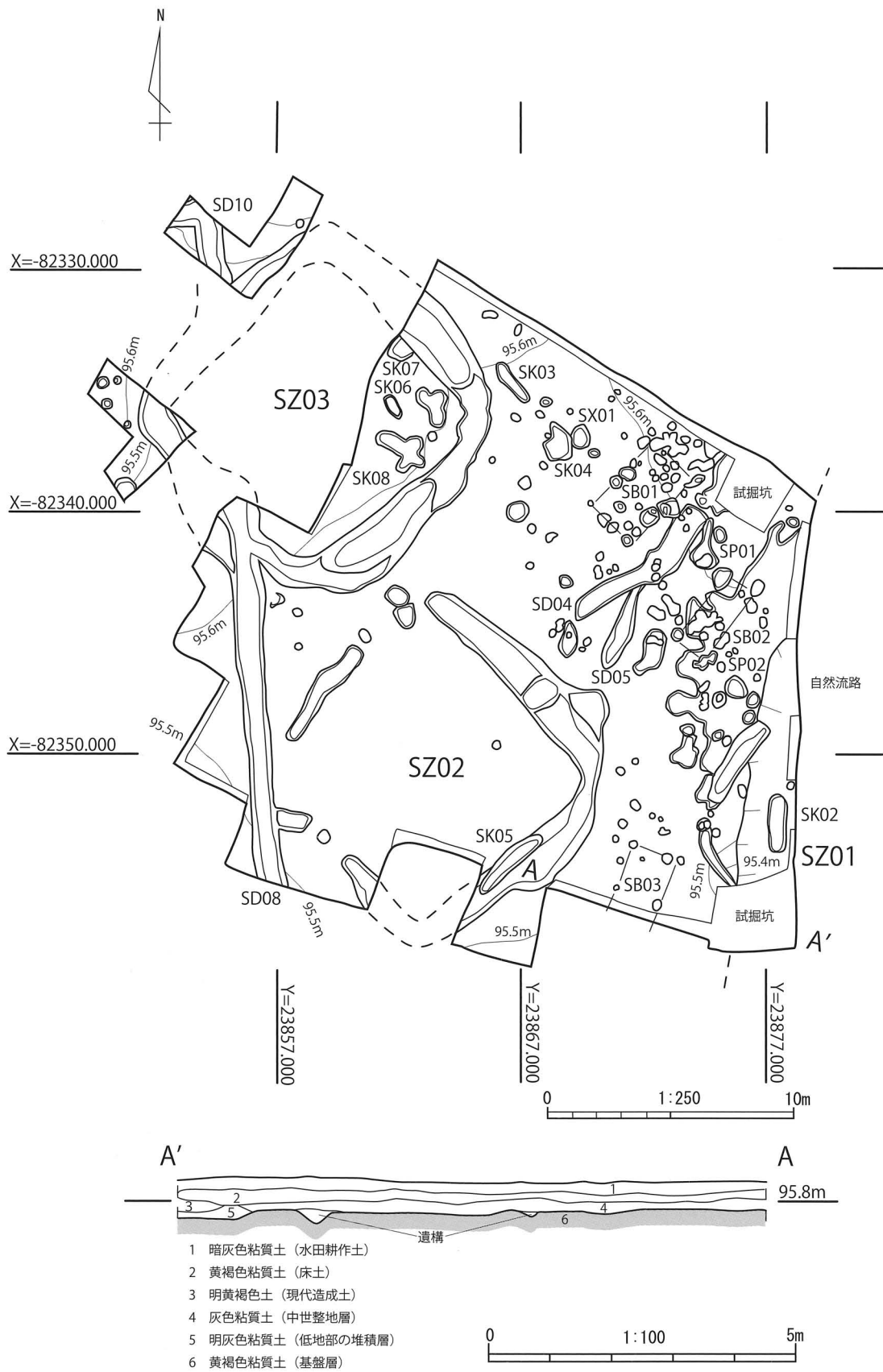


図3 調査区全体図

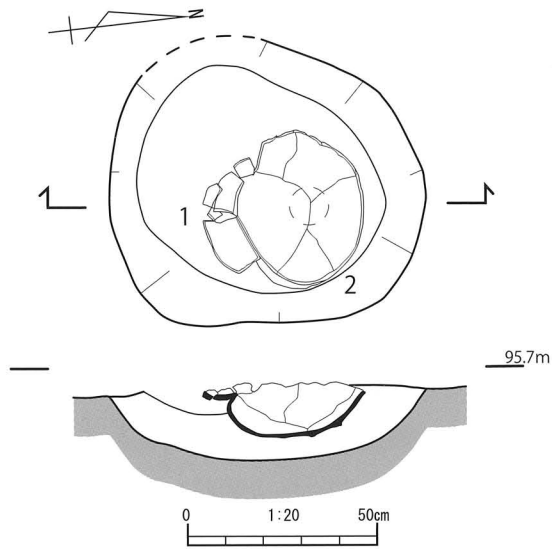


図4 SX01

起の間には2本の並行沈線があり、その下には多数の平行線と直線を組み合わせた文様がみられる。さらにその下には、連続する弧文がみられ、渦巻き文の上部であるとみられる。外面のナデ調整は丁寧で、器面は平滑である。内面には横ナデ調整と指頭圧痕がみられる。外面には赤彩が塗布されており、沈線のくぼみなどにわずかに残っている。

2は、遠賀川系新段階の壺形土器である。弥生時代前期後半（第I様式新段階）で、肩部から底部にかけて残存する。肩部には5条のヘラ描沈線が配される。大きく膨んだ胴部から底部に向かってすぼまっている。底部は

若干上げ底となる。外面のナデ調整により、器面は滑らかである。内面はナデ調整が施され、継ぎ目痕が残る。3は、壺の中から出土したサヌカイト剥片である。

(2) その他出土遺物

4は、SD08から出土した甕の口縁部片で、弥生時代前期の遠賀川系土器と推定される。口縁端部には刻み目が施され、内外面にはナデ調整が施される。5は、調査区南西端の遺構検出面で出土した磨石・敲石である。両面及び側面に敲打痕がみられる。湖東流紋岩製で、490gである。弥生時代前期よりも古い時期の遺構は検出されていないため、弥生時代前期の遺物であると推定される。

(3) 小 結

土器棺墓SX01は、土器の時期から、弥生時代前期後半に位置するものと考えられ、確認された当該期の遺構としては唯一である。土器棺墓では、北陸地方の系統である柴山出村式と西日本に広く分布する遠賀川系土器が共伴し、北陸地方との交流があったことがわかる。また、土器棺墓のみが検出されているものの、周辺に集落が存在する可能性は十分に考えられる。

当該期の遺跡は数少ないが、下沢遺跡周辺では、犬上川扇状地に立地する北落遺跡で弥生時代前期後葉の東海地方を中心に分布する条痕文系土器と遠賀川系土器が出土し、荒神山麓の稲里遺跡においては、弥生時代前期（第I様式新段階）の集落が検出され、条痕文系土器と遠賀川系土器が出土している（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会2000）。コメ・キビ・ヒエ・アワも出土しており、水田稲作と畑作を行っていたことがわかっている。条痕文系土器の出土は東の地域との交流関係を示している。

琵琶湖湖岸の松原内湖遺跡では、縄文時代晩期終末の竪穴建物から弥生時代前期前半の遠賀川系土器が出土し、縄文文化と水田稲作を基本とする弥生文化との交流を示している。弥

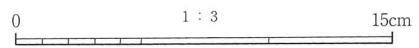
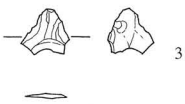
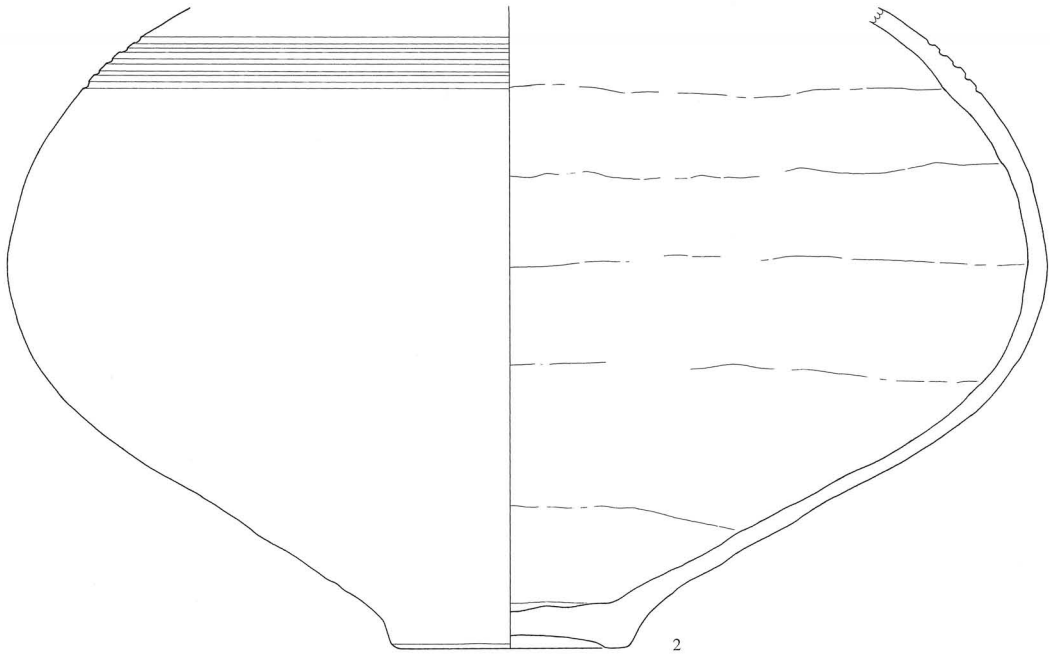
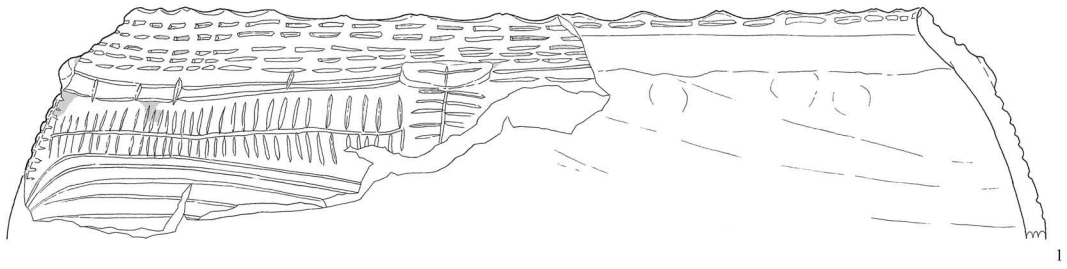


图5 SX01出土遺物

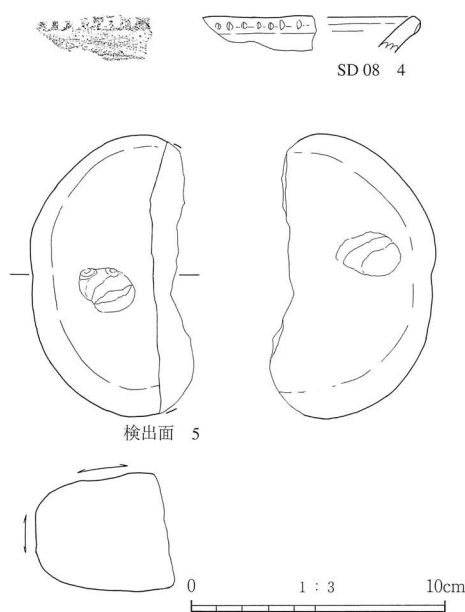


図6 その他出土遺物

生時代前期後半になると、相当数の土器がみられるようになる（中村2011）。

下沢遺跡、稲里遺跡、松原内湖遺跡が、琵琶湖湖岸の水田稲作に適した低地の湿潤な土地に立地する一方、北落遺跡は水田稲作に適さない犬上川扇状地に立地している。水田稲作に適した土地と不適な土地の両方に集落が営まれている様子がうかがわれ、縄文時代晩期の集落立地をほぼ踏襲している。琵琶湖湖岸周辺に位置する下沢遺跡、稲里遺跡、松原内湖遺跡においては、水田稲作を基本とした集落が営まれていたのであろう。下沢遺跡とその周辺の集落の様相は未だ不明瞭であり、今後の周辺の調査が期待される。

参考文献

- 石黒立人 2003「中部地方の土器」『考古資料大観 第1巻弥生・古墳時代土器Ⅰ』小学館
- 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 2000『稲里遺跡』県営一般農道整備事業関連遺跡発掘調査報告書
- 中村健二 2011「弥生時代における松原内湖遺跡の意義」『松原内湖遺跡Ⅱ』琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う発掘調査報告書Ⅱ

3 弥生時代終末期～古墳時代初頭

(1) 概要

弥生時代終末期～古墳時代初頭の方形周溝墓3基の他に、溝と土壇墓の可能性のある遺構を検出した。方形周溝墓は、溝の隅が途切れるものと、途切れないものがあり、いずれも方位が同じである。墳丘盛土は確認されなかった。各方形周溝墓の周溝からは、庄内式併行期の土器が出土した。以下、方形周溝墓の規模を示すにあたっては、周溝内側の屈曲点、すなわち、溝底から墳丘が立ち上がる基点を結んだ長さを計測値とする。

(2) 方形周溝墓

SZ01（図8） SZ01は、調査区東端において検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態であると推定され、西溝と南溝を確認した。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは、東西推定5.0m、南北推定6.9mで、推定面積35㎡である。西溝の最大幅は92cmで、幅が最大の位置の深さは40cmである。南溝の最大幅は50cmで、幅が最大の位置の深さは12cmである。西溝北端の比較的高い位置からは、身の半分を欠損する壺（6）が横位の状態で出土した。壺は、比較的周溝内の堆積が進んだ段階から原位置にあったと想定される。墳丘上、あるいは

は周溝内に立てられていた可能性が考えられる。土層の観察では、地山ブロックを多く含む2層が周溝内内側でみられ、墳丘盛土の流入土であると推定される。また、周溝より内側では、土坑SK02が検出された。長さ2.2m、幅0.7m、深さ約5cmで、長楕円形である。残存状況は良好ではない。方形周溝墓のほぼ中心に位置しており、周辺に古代から中世の遺構が存在しないことから、方形周溝墓の埋葬施設であると推定される。

6は、西溝から出土した受口状口縁壺である。口縁部から底部までのほぼ半分が残存する。大きく外反する口縁の端部には明確な面をもち、外面には波状文と刺突が施される。肩部には刺突と波状文が、その下には沈線2条が間に波状文を挟んで施される。体部は球体化し、内外面ともに丁寧なナデ調整である。ただし、内面には小さな粘土塊が付着するなど、外面ほど丁寧ではない。底部内面には放射状にヘラナデの痕をとどめる。底部は比較的薄い上げ底である。

SZ02 (図9) SZ02は、調査区中央南側で検出した方形周溝墓である。北西部と南東部の2箇所が途切れるものである。東西10.5m、南北9.6m、面積100.8㎡である。西溝の最大幅は84cmで、幅が最大の位置の深さは、4cmである。北溝の最大幅は、1.8mで、幅が最大の位置の深さは、24cmである。東溝の最大幅は、2.1mで、幅が最大の位置の深さは、17cmである。南溝は、最大幅が1.4mで、幅が最大の位置の深さは、10cmである。西溝は幅狭く、周溝の北東部は幅が狭くなっている。南西の陸橋部は5mで、北西の陸橋部は3.2mである。東溝の中では、長さ3.2m、幅0.75mの掘り方が溝に沿ってみられる。周溝内埋葬の可能性がある。北溝のやや西側では、壺(7)が、西溝では、受口状口縁甕の頸部(8)が出土した。7は破片となっていたが、頸部から肩部にかけては正位の状態であり、もともとは正位の姿勢であったと考えられる。頸部の高さから床面までの長さから推定すると、土器は周溝床面に立て並べられていたものと推定できる。7は、広口壺で、肩部から底部にかけての外面にはハケ調整が施される。胴部下方の内面にもハケ調整が施される。底部は平底で、中央に幅1.5cmほどの欠損部があり、焼成後に穿孔された可能性が考えられる。胴部片は残存するが、接地面がなく、凶化していない。8は、西溝の検出中に出土しており、詳細な位置は不明だが、西溝に伴う可能性は高いと考えられる。受口状口縁甕の頸部で、ハケ調整の後に斜格子の沈線が、その下には一条の沈線が施される。

SZ03 (図11・12) SZ03は、調査区北西部で確認された方形周溝墓である。周溝が全周めぐらるものと推定される。排土処理などの関係で、全体を検出することはできなかったが、全形を復元できるように、北西部に2箇所のトレンチを設定した。東西推定9.4m、南北推定9.1m、推定面積86㎡である。北溝の最大幅は、2mで、幅が最大の位置の深さは、29cmである。東溝の最大幅は、2.3mで、幅が最大の位置の深さは、25cmである。北東隅の深さは11cm、南東隅の深さは10cmで、隅が浅くなっている。西溝は、確認することができた部分で深さ12cmである。南東部分では、深さ17cmである。北溝の土層断面では、地山ブロックを含む2層が周溝墓内側から流入した状況がうかがわれる。

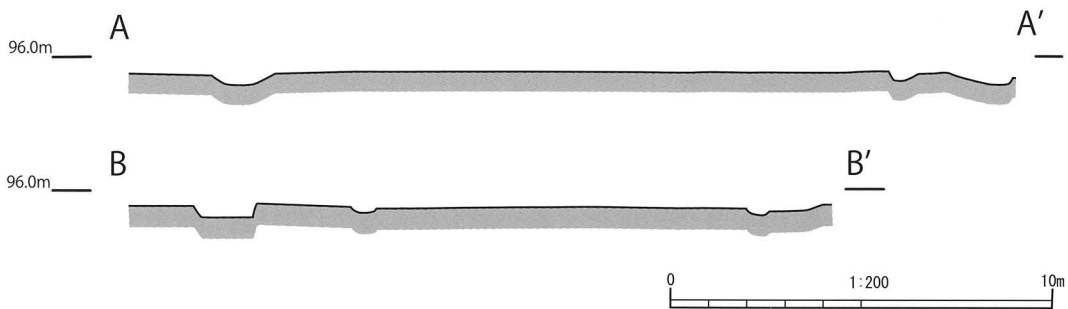
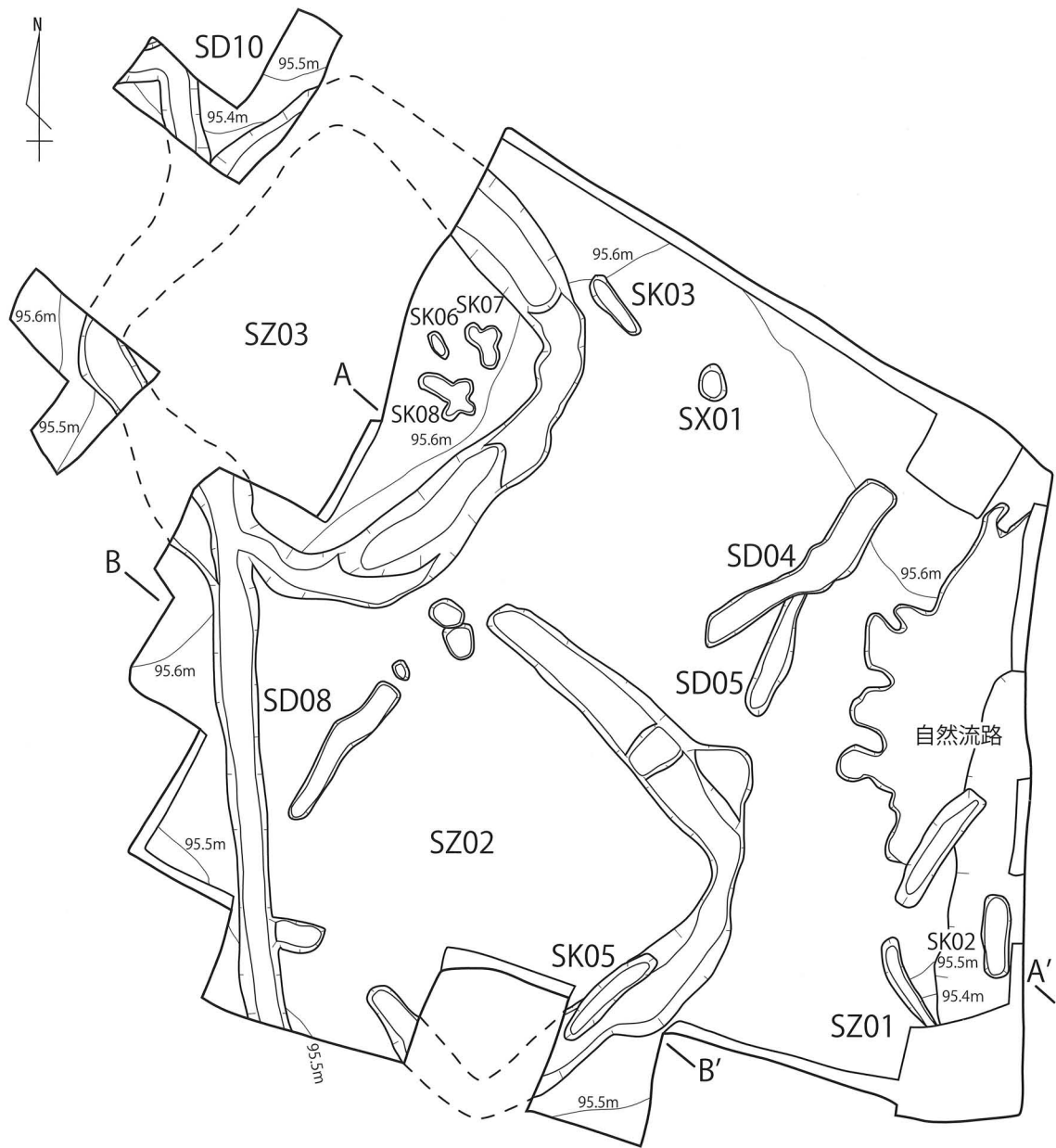


图7 方形周沟墓群

東溝からは、壺2点（9）、（10）が出土した。周溝のなかでも中位の高さから、破片の状態出土した。北溝からは、11～19の壺、鉢、高坏、器台が破片の状態出土した。土器の周辺では、土器と同じほぼ高さで、5 cm 大の自然木1点出土した。土器は周溝の上層から下層にわたっており、ほとんどが上層から出土している。平面の位置でもほぼまとまって

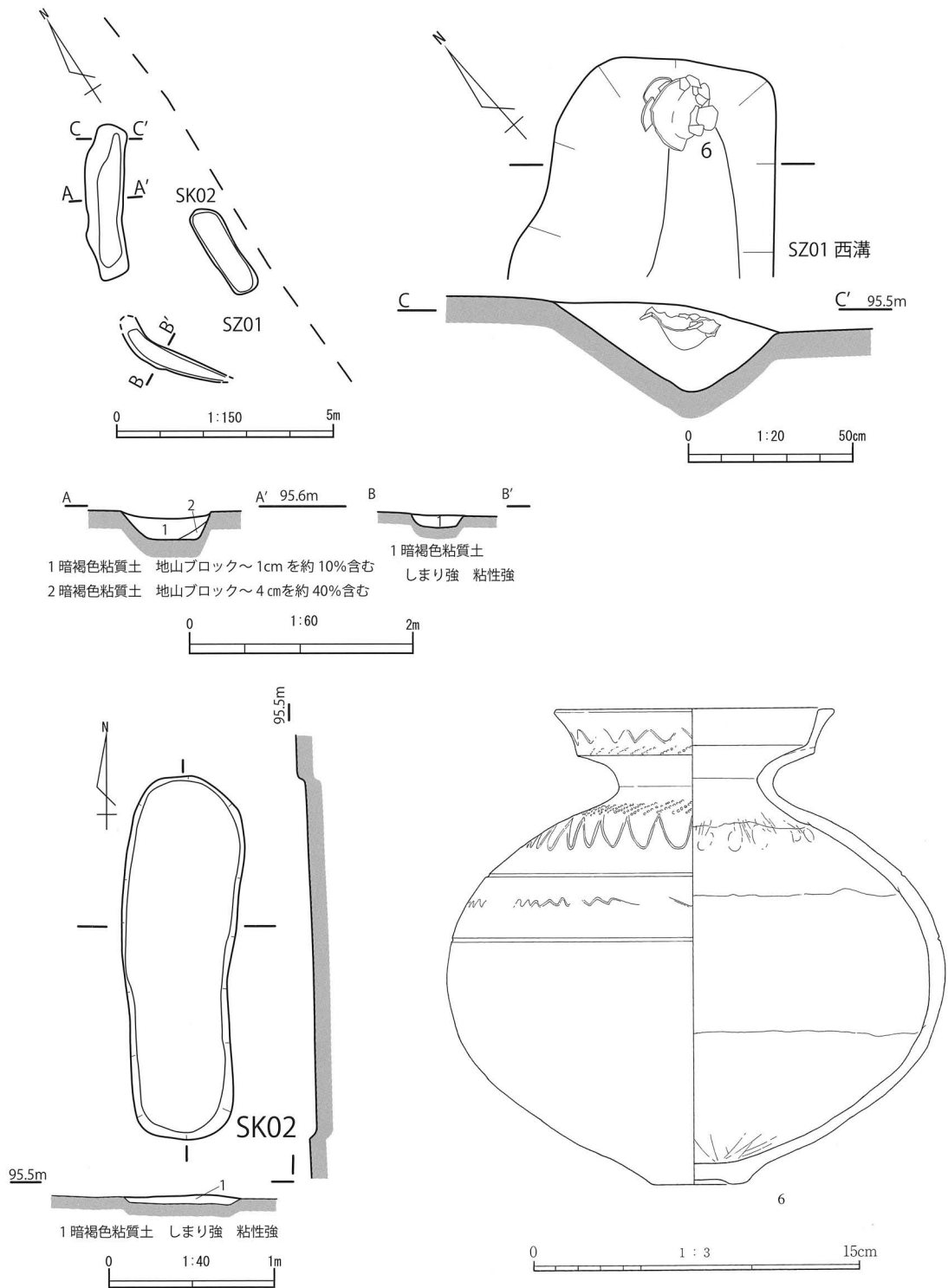


図8 SZ01・SK02出土土器

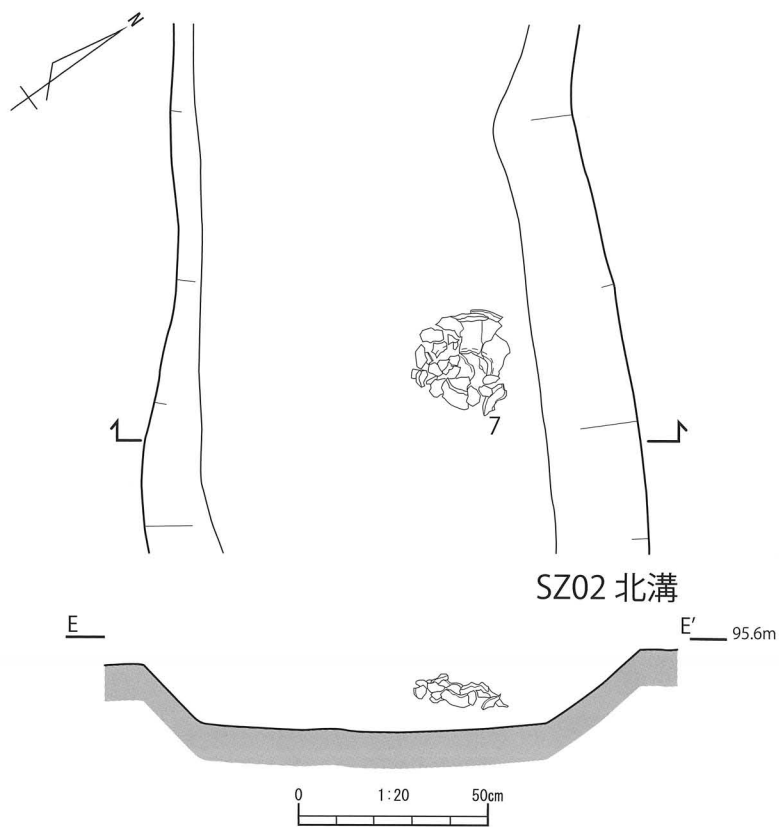
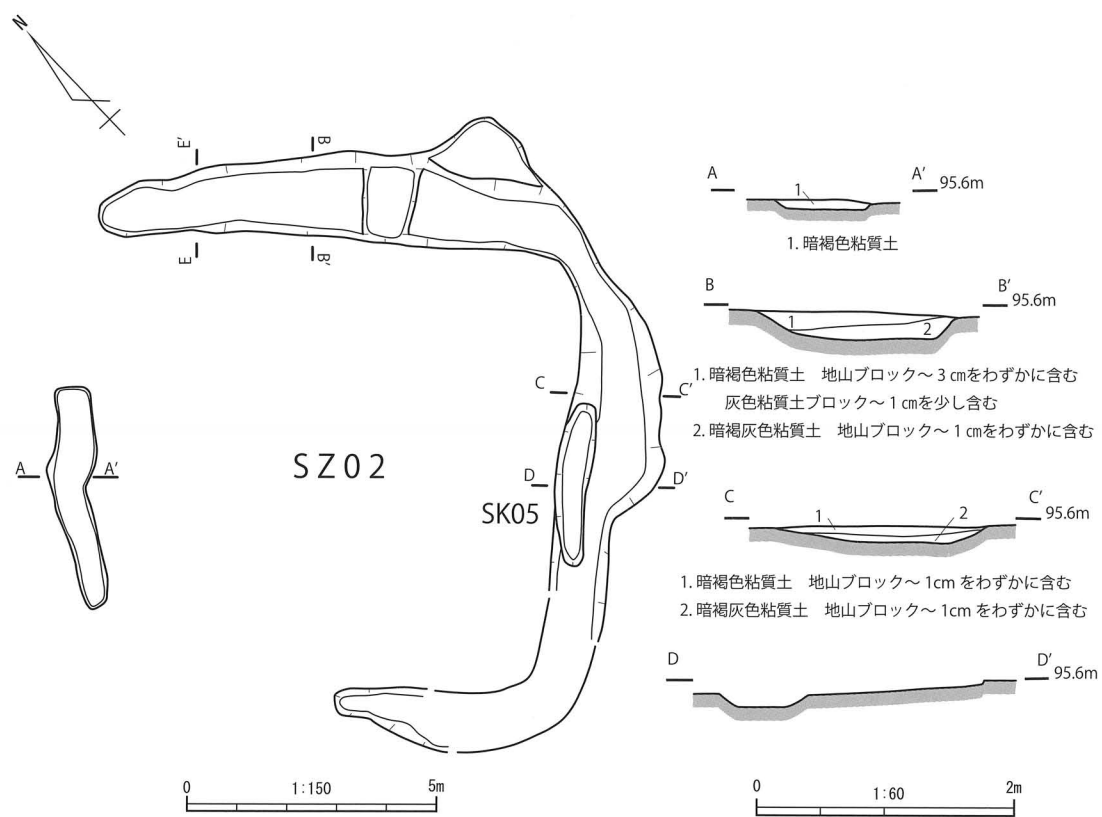


図9 SZ02

おり、一括で廃棄された状態を示すものであろう。

南東部では、周溝と溝 SD08が切り合っており、土層断面では、南溝がSD08を切っている状況が確認された。また、西溝はSD10と切り合っており、西側へ伸びている。SD08の最大幅は1.3mで、最深部で深さ30cmである。SD08の断面は台形で、ゆるやかな面をなす方形周溝墓の周溝断面の様子とは異なる。SD08からは、弥生時代前期と推定される甕（4）、8世紀代の須恵器短頸壺（30）、中世の土師器皿（33）が出土しているのみで、時期ははっきりしない。須恵器短頸壺と土師器皿は、検出面に近い高さで出土しており、混入した可能性がある。ただし、弥生時代前期と考えられる土器も1点しか出土しておらず、時期を古く考えることはできない。切り合い関係と周辺の遺構との関係から、弥生時代終末期から古墳時代初頭、あるいはそれ以前の遺構であると推定しておきたい。

9と10は、東溝から出土した土器である。9は、広口壺で、口縁端部が拡張され、端部には刻みが、外面には波状文の装飾が施される。頸部はほぼ垂直で、肩部には直線文と刺突文がある。10は、受口状口縁甕である。無文で、外面には縦のハケ調整が施される。

11～19は、北溝から出土した土器である。11は広口壺で、口縁端部が少し拡張され、外面には凹線文がみられ、3個1組の円形浮文が間隔をもって配される。頸部は少し詰まり、外面はナデ調整である。12は、下膨れの細頸壺である。口縁部の一部を欠く。調整は、口縁部内外面と外面肩部は縦ミガキで、外面胴部最大径の少し上の位置から下方にかけては横ミガキである。外面胴部下から底部にかけては、縦ミガキである。底部から胴部下方の内面は、螺旋状のハケ調整である。底部には径2.5cmのくぼみがある。

13は、鉢である。外面の調整は摩滅のためにはっき

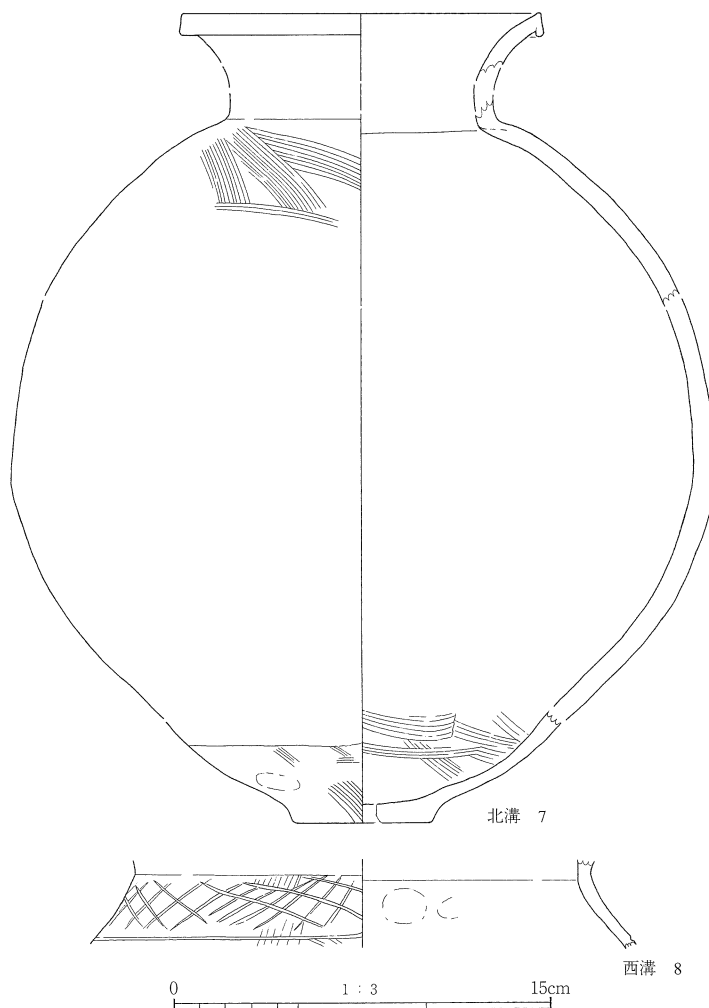


図10 SZ02出土遺物

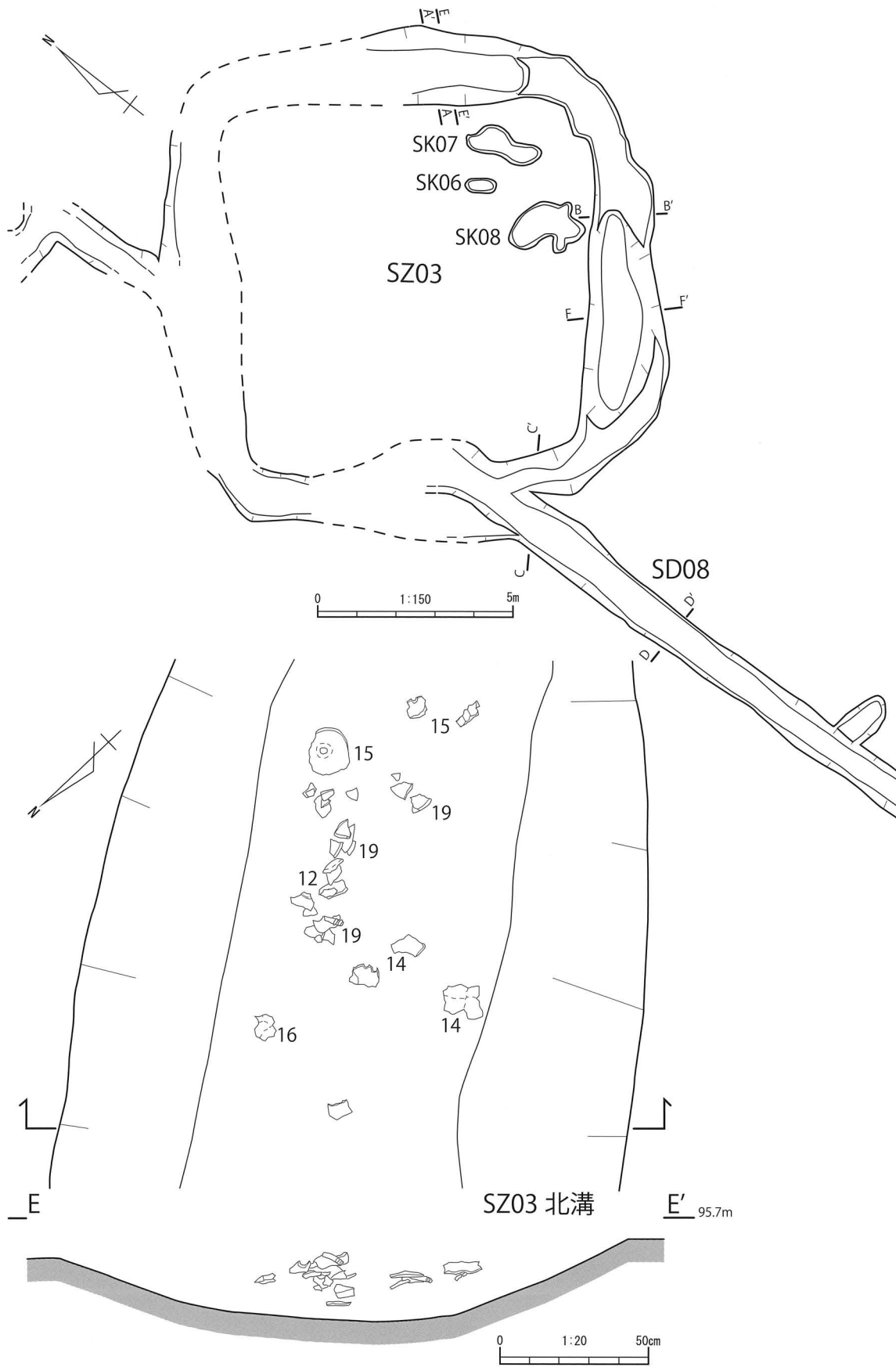
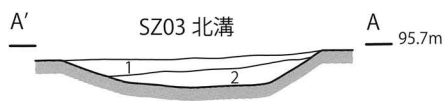
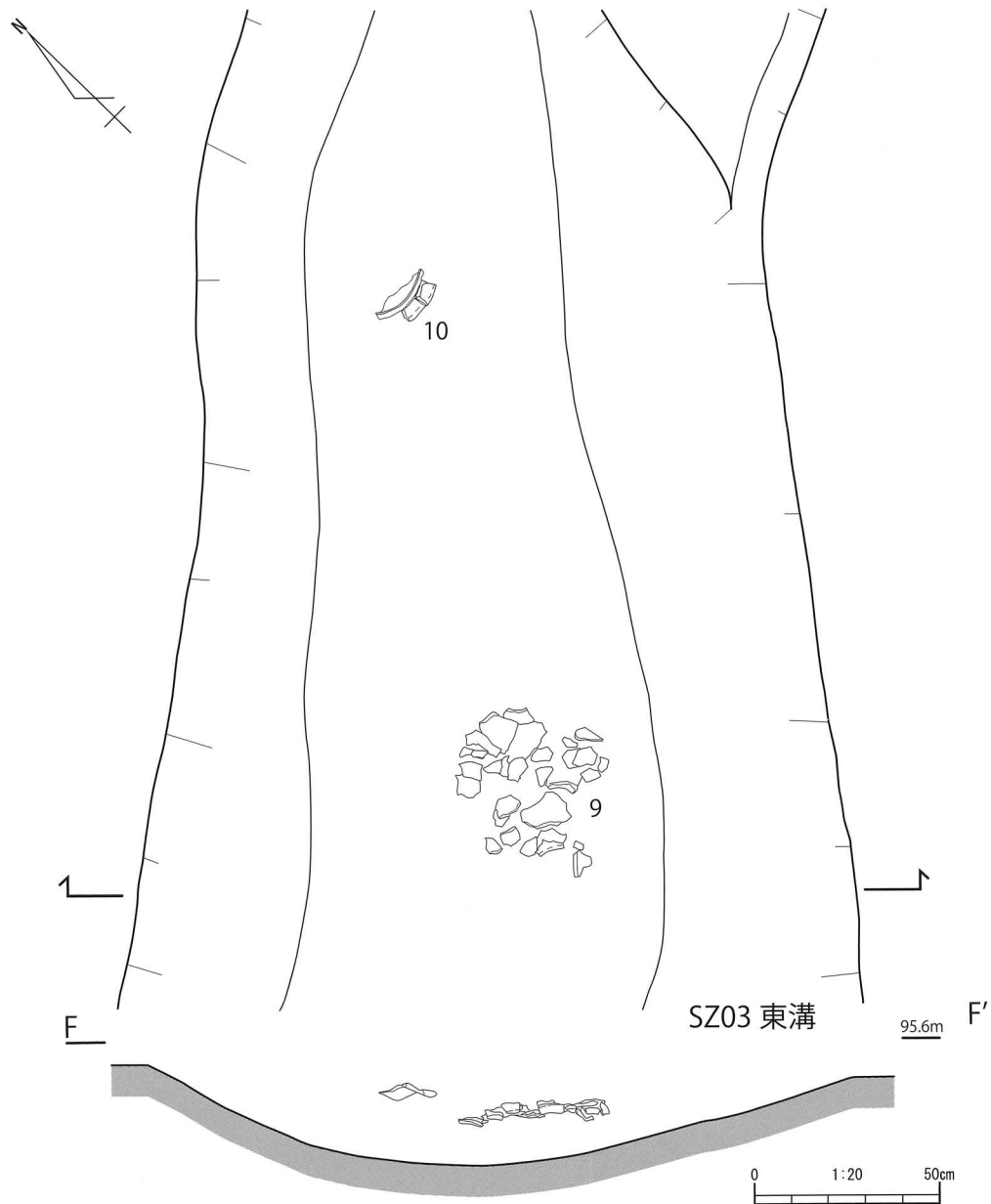
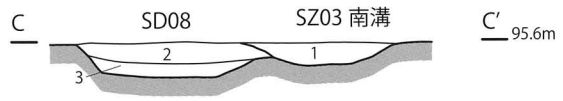


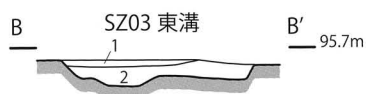
图11 SZ03 (1)



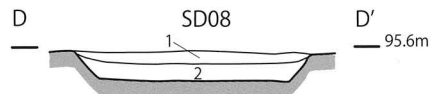
- 1 暗褐色粘質土 しまり良 粘性強
- 2 暗褐色粘質土 地山ブロック~5mmをわずかに含む 墳丘盛土初期流入土 しまり良 粘性強



- 1 暗褐色粘質土 灰色粘質土ブロック~1cmを少し含む しまり良 粘性強
- 2 暗褐色粘質土 灰色粘質土ブロック~5mmをわずかに含む 地山ブロック~3mmを少し含む
- 3 暗褐色粘質土 しまり良 粘性強



- 1 暗褐色粘質土 地山ブロック~3mmをわずかに含む しまり良 粘性強
- 2 暗褐色粘質土 地山ブロック~1cmをわずかに含む 灰色粘質土ブロック~2cmを少し含む



- 1 暗褐色粘質土 2層より明度が高い しまり良 粘性強
 - 2 暗褐色粘質土 灰色粘質土ブロック~1cmを少し含む しまり良 粘性強
- ※1・2共に地山ブロックをほとんど含まない

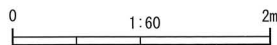


図12 SZ03 (2)

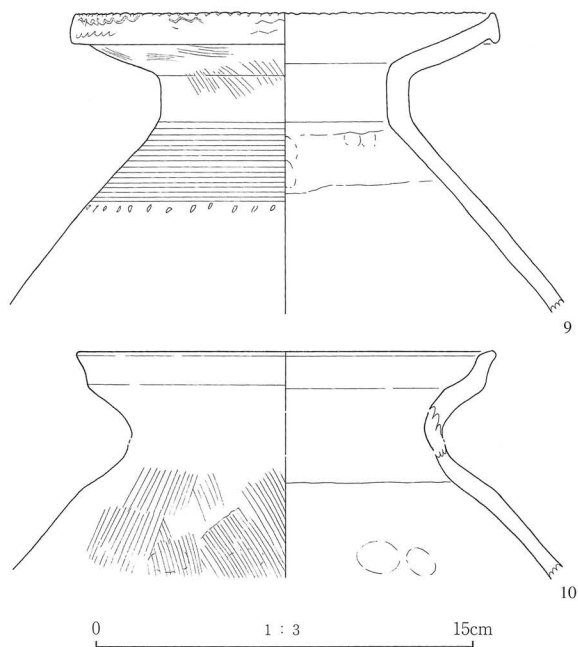


図13 SZ03東溝出土遺物

りしない。14～16は高坏である。14と15は有稜高坏で、16もその可能性が高い。14は、坏部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部に面をもち、脚部も同様にやや内湾する。坏部の内外面および脚部外面に縦ミガキが施される。脚部内面は、指押さえの後ヘラナデ調整で、下方は横ハケ調整である。端部はナデ調整が施され、面をもつ。脚部の透かしは、上下に並列したものが三方にあると推定される。15は、脚部がやや内湾し、坏部の内外面に縦ミガキが施される。ただし、外面の磨きは、内面のものよりも幅広いものである。坏底部には粘土が充填される。脚部外面は縦ミガキで、内面は上方がナデ調整、下方が横ハケ調整である。端部にはナデ調整が施され、面をもつ。透かしは上下に並列したものである。

16は脚部で、坏部内面には粘土が充填され、径0.7cmのくぼみをもつ。17と18は、やや内湾する脚部片で、器台の脚よりも内湾の度合いが強く、高坏の可能性が高い。おそらく有稜高坏であろう。17は、外面に縦ミガキが、内面には縦ハケ調整が施される。下方はナデ調

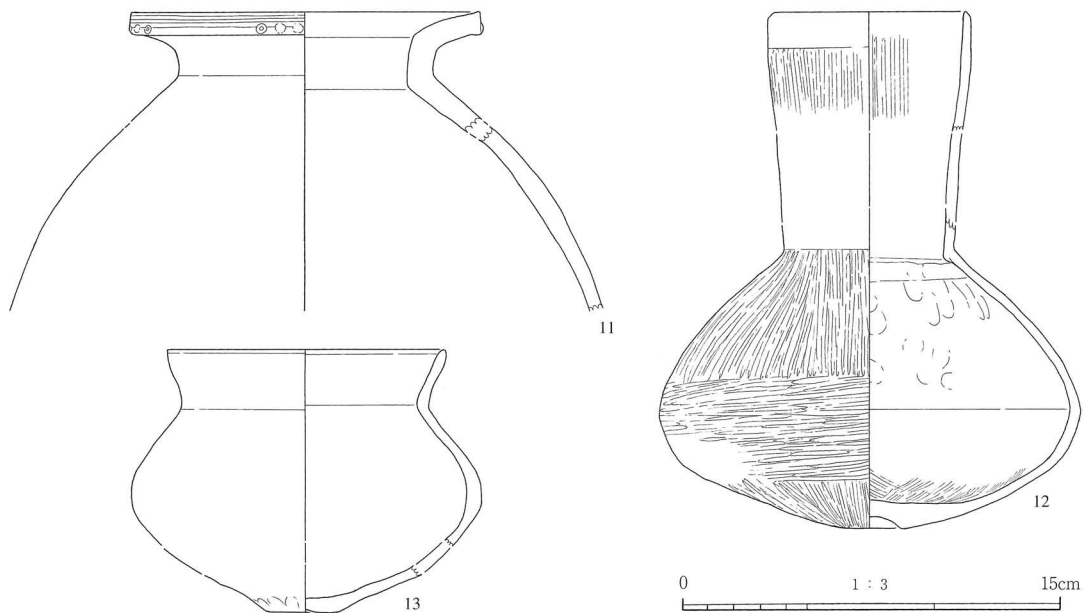


図14 SZ03北溝出土遺物（1）

整され、端部に面をもつ。18は、内外面に縦ミガキが施され、端部には面をもつ。19は、器台である。坏部の口縁端部が拡張され、外面には凹線文があり、3個1組の棒状浮文が間隔をもつて配される。内外面は縦ミガキである。脚部外面も同様に縦ミガキが施される。内面は上方がナデ調整、下方がナナメハケ調整である。透かしを三方にもつと推定される。

また、周溝より内側では、SK06、SK07、SK08が確認された。SK06(図16)は、長さ80cm、幅36cm、深さ10cmの長楕円形の土坑である。SK07(図16)は、長さ2.0m、最大幅72cm、深さ8~16cmの不定形の土坑である。SK08(図16)は、長さ1.9m、最大幅1.16m、深さ10cmの不定形の土坑である。これらの遺構からは遺物が出土していないが、軸が並び、周溝より内側で近接している点が注目される。

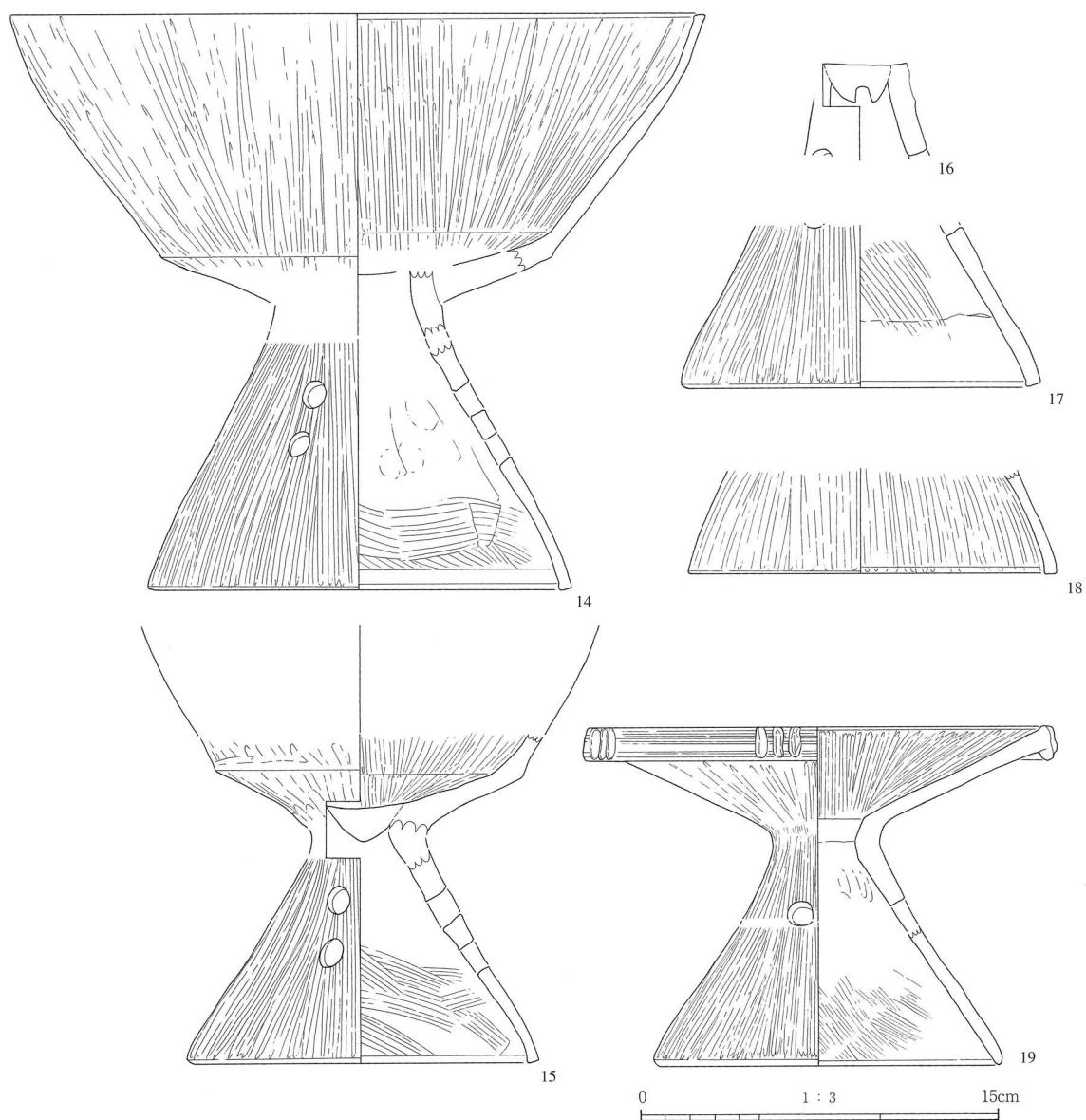


図15 SZ03北溝出土遺物(2)

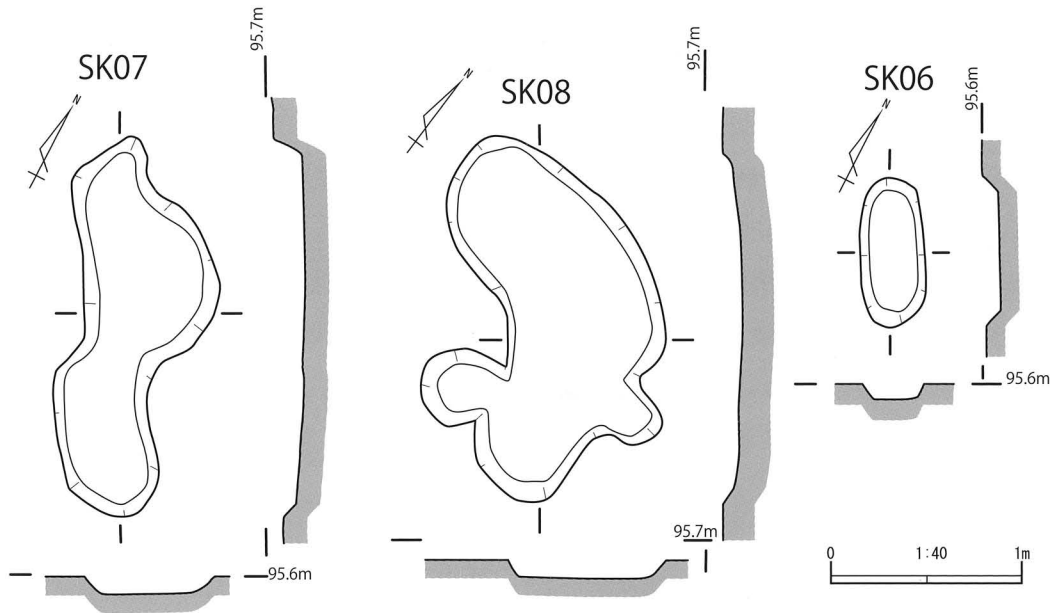


図16 SK06・07・08

(3) その他の遺構と遺物

SD04・SD05 (図17) SD04, SD05は、SZ02の北側で検出された溝である。SD04の最大幅は1.1mで、最も幅の広い位置の深さは、12cmである。SD05の最大幅は80cmで、最も幅の広い位置の深さは、23cmである。SD04がSD05をきっている。SD04からは、口縁外面に3条の沈線が施された受口状口縁甕(21)が出土した。他の時期の遺物は出土しておらず、方形周溝墓とほぼ同時期であると推定される。また、SD05はSD04にきられている。少なくとも、SD04は、SZ01・02・03と近い時期の遺構であると推定される。

なお、SZ02北溝とSZ03東溝を共有する方形周溝墓である可能性もあるが、対応する北溝が確認できないため、断定することはできない。

また、SZ02西溝とSD08付近の遺構検出面において、受口状口縁甕(20)が出土した。外面には刺突をもち、口縁部の屈曲がゆるやかである。

SK03 (図19) SK03は、SZ03の北東部で確認された。長さ1.9m、最大幅62cm、深さ12cmの土坑である。形状や大きさから、土壙墓である可能性が考えられる。

(4) 小 結

弥生時代終末期～古墳時代初頭においては、墓域として方形周溝墓が設定されており、3基確認された。この他に、溝と土壙墓の可能性のある遺構も確認された。立地としては、東側は落ち込んで低地となって自然流路が存在し、自

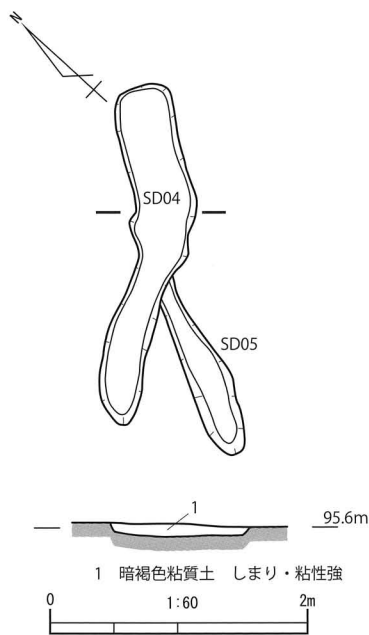


図17 SD04・SD05

然流路をはさんだ対岸の様相は不明である。微高地が芹川に沿うように、調査区の北西と南東へ伸びており、墓域は調査区外へ展開する可能性がある。

方形周溝墓は、隅の途切れるものと、途切れないものがあり、いずれも方位が共通している。方形周溝墓の大きさには差異があり、SZ01は東西推定5.0m、南北推定6.9m、SZ02は東西10.5m、南北9.6m、SZ03は東西推定9.4m、南北推定9.1mである。小規模なSZ01と規模のやや大きなSZ02、SZ03がある。

各方形周溝墓の周溝からは、弥生時代終末期から古墳時代初頭に至る移行期（庄内式併行期）の土器が出土し、時代の変革期の短期間に営まれた墓域であると考えられる。

参考文献

- 植田文雄 1988「古式土師器の編年」『斗西遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集
- 植田文雄 1993「古墳時代土器の検討」『斗西遺跡（2次調査）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集
- 植田文雄 1994「湖東北域の近江系について」『庄内式土器研究』VI 庄内式土器研究会
- 中居和志 2010「古墳出現前後の近江地域—土器編年を中心に—」『立命館大学考古学論集V』立命館大学考古学論集刊行会
- 伴野幸一 2001「下長遺跡出土土器の編年的位置」『下長遺跡発掘調査報告書IX』守山市文化財調査報告書
- 伴野幸一 2006「近江地域—野洲川流域を中心に—」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

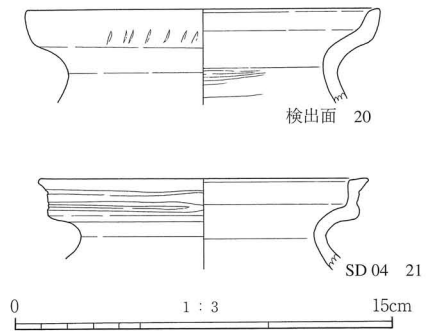


図18 SD04・検出面出土遺物

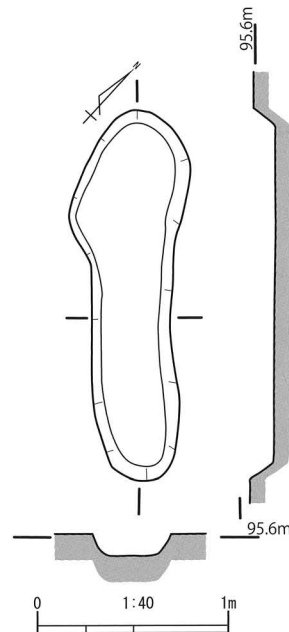


図19 SK03

4 奈良時代以降

(1) 概要

調査区内では、整地層の可能性のある4層が全体にわたってみられ、この層には7世紀～16世紀代の遺物が含まれ、12～13世紀の遺物が主体である。遺構としては、中世のものと推定される掘立柱建物跡3棟を確認した。また、東端には落ち込みがあり、さらに東側の自然流路へとつながっている。落ち込みからは、8世紀～12世紀頃の遺物が出土している。

(2) 掘立柱建物

SB01 (図20) 2×1間の構造で、規模は東西2.1m、南北3.6m、面積7.6㎡である。

SB02 (図20) 2×1間の構造で、規模は東西1.3m、南北2.8m、面積3.6㎡である。

SB03 (図20) 東西1.8mで、SB01と規模に近いものと推定される。

掘立柱建物跡の柱穴からは、遺物が出土しておらず、はっきりした時期は不明であるが、4層からは12～13世紀の遺物が主に出土していることから、これらの遺物の示す時期に位置するものであると推定される。

(3) 出土遺物

22～28は、東端の落ち込みから出土した。22は、8世紀代の須恵器坏である。23は、8～9世紀の須恵器坏である。24、25、26は9～10世紀の灰釉陶器碗である。27、28は11～12世紀の土師器皿である。

29は、調査区南西隅の検出面で出土した土師器長胴甕である。7世紀中頃～8世紀初頭である。

30は、SD08から出土した須恵器短頸壺である。8世紀後半と推定される。31は、4層から出土した8世紀代の須恵器坏である。32は4層から出土し、須恵器長頸壺の底部と推定される。8世紀後半であろう。33は、SD08から出土した土師器皿で、11～12世紀代のものであろう。34は、4層から出土した土師器皿である。12～13世紀代と推定される。35は、4層から出土した13世紀代の鎬蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗である。36は、4層から出土した15～16世紀の播鉢である。

(4) 小 結

奈良・平安時代から室町時代までの遺物が出土していることから、この間、集落は存続していた可能性がある。遺構としては、3棟の掘立柱建物が確認されており、12～13世紀代と推定される。いずれも方位が共通しており、ほぼ同じ時期のものである可能性が高い。自然流路の近傍において、中世前期を中心として集落が形成されていたと考えられる。なお、明治時代の地籍図によると、調査区に対応する位置の字名は、「本ノ前」とされ、その東側は、試掘調査で確認された自然流路の存在と符合するように、「沢」とされる。地籍図では、周辺に2～3条の小河川がみられ、芹川に由来する旧河川であるとみられる。集落は芹川北岸の狭い範囲に限られており、その他は水田となっている。このように地形環境に影響されつつも、中世から近世まで集落が存続していたものと考えられる。

参考文献

彦根市史編集委員会 2002『彦根 明治の古地図二』彦根市

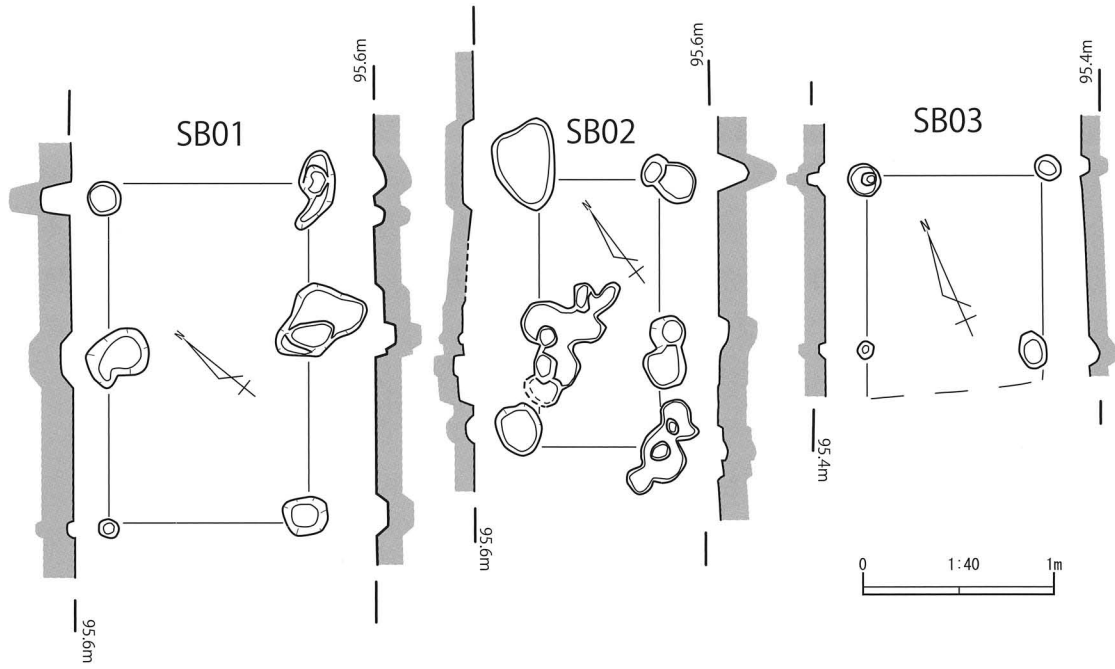


図20 掘立柱建物

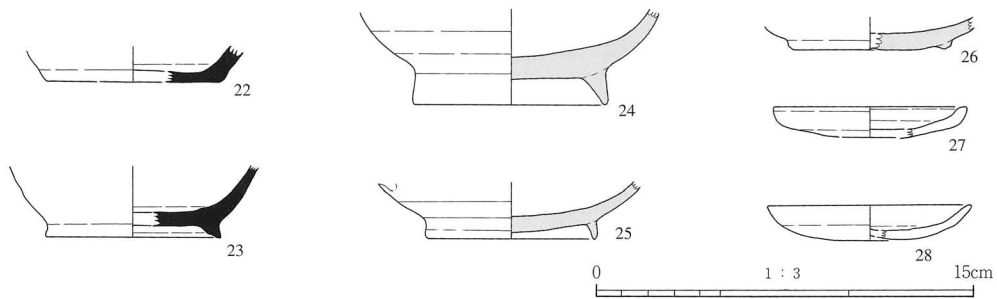


図21 落ち込み出土遺物

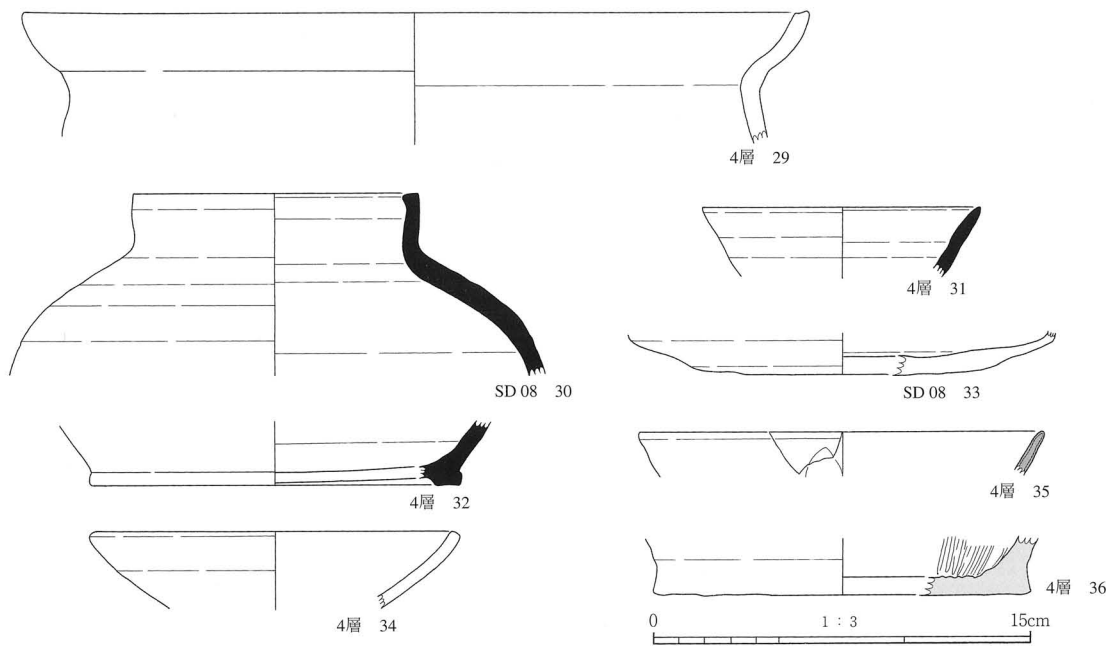


図22 SD08・4層出土遺物

第3章 総括

1 下沢遺跡の方形周溝墓と出土土器について

(1) 出土土器の器種構成

今回の調査では、方形周溝墓からなる墓域が確認されたことが、重要な成果の一つである。方形周溝墓出土土器は、芹川流域における庄内式併行期の土器の様相を示す貴重な遺物である。SZ01西溝、SZ02西溝・北溝、SZ03東溝・北溝から土器が出土した。壺と高坏が多く、その他に鉢、器台、甕が出土している。

壺 壺には、広口壺、受口状口縁壺、細頸壺がある。

広口壺には、緩やかに外反する口縁をもつ7、9、11がある。7は無文、11は加飾壺である。9は、垂直な頸部をもつ加飾壺である。

受口状口縁壺としては、6が出土している。6は、波状文を多用した加飾壺である。細頸壺としては、12が挙げられる。

鉢 鉢は13のみで、単純口縁で、頸部がくの字状になるものである。

高坏 高坏としては、14、15、16、17、18が出土している。全形がわかる14と15は、有稜高坏である。いずれも坏部が深く、14は坏部が内湾するものである。14、17、18は脚端部に面をもつ。16、17、18も有稜高坏の可能性が高い。

器台 器台としては、19がある。受部口縁端部に擬凹線文があり、棒状浮文をもつ。

甕 甕では、受口状口縁甕の可能性の高い8が出土している。頸部に斜格子文と沈線をもつ。また、10は、無文の受口状口縁甕である。

その他に、明確に方形周溝墓に伴う土器ではないが、遺構検出面で出土した20、SD04から出土した21がある。20は、外面に刺突文のある受口状口縁甕である。21は、口縁部外面に3条の沈線をもつ受口状口縁甕である。SZ03北溝で高坏が多く出土し、各方形周溝墓からは、壺が出土している。供献土器は、主に壺と高坏からなる。受口状口縁甕をみると、10、20の近江北部系と8、21の近江南部系の両者がみられる。墳墓出土土器に限られるが、近江北部と近江南部の境界域に位置する湖東北部の地域的な土器の様相を知ることができる。高坏や壺類には東海地方からの影響が強く認められる。

(2) 出土土器の型式編年的位置

ここでは、近江や周辺地域の編年と比較し、出土土器の編年的位置について検討しておきたい。近江の編年として、斗西遺跡出土土器を中心とした斗西様式編年（植田1988・1993・1994）、野洲川流域編年（伴野2001・2006）、近江地域全域を対象とした編年（中居2010）を、濃尾平野の編年として廻間編年（赤塚1990・1997）を用いる。

SZ01 西溝から出土した受口状口縁壺（6）は、庄内式併行期新段階以降に位置する。

SZ02 西溝から出土した甕（8）、北溝から出土した広口壺（7）は、ともに庄内式併行期初頭段階のものである。

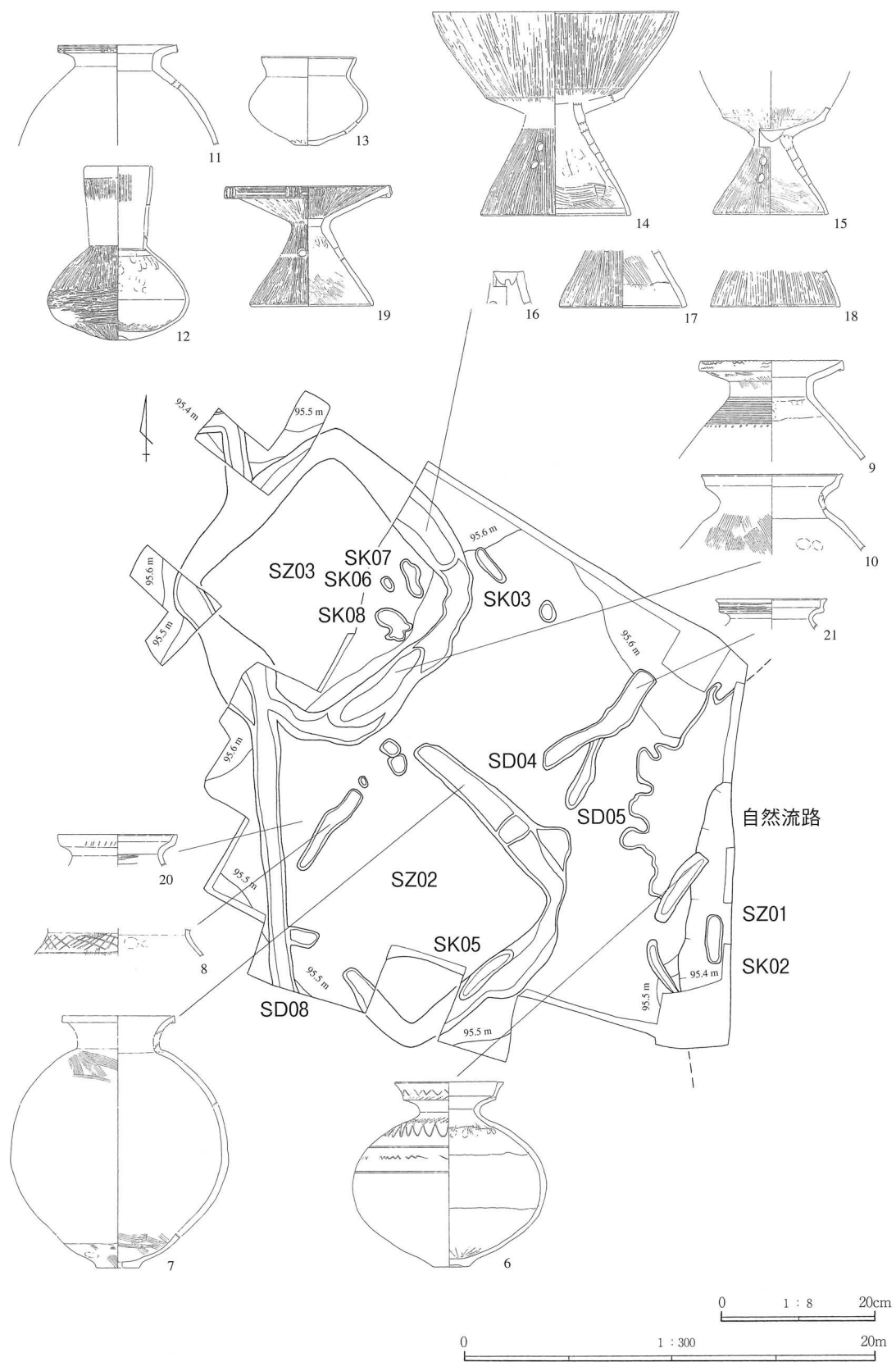


图23 方形周溝墓群と出土土器

SZ03 東溝から出土した壺（9）は、庄内式併行期新段階で、受口状口縁甕（10）は、庄内式併行期古段階である。11～19は北溝で出土し、広口壺（11）、長頸壺（12）は、庄内式併行期新段階、鉢（13）は、庄内式併行期古段階である。14～18の高坏は、庄内式併行期新段階、器台（19）は、庄内式併行期古段階～新段階である。

出土土器をまとめると、SZ02が庄内式併行期古段階、SZ03が庄内式併行期古段階～新段階、SZ01が庄内式併行期新段階である。これらの出土土器は、築造された時期を直接に示すものではないが、おおむね方形周溝墓が造営されていた時期を示すものと考えられる。

（3）築造時期

各方形周溝墓は、庄内式併行期を中心とする時期のものであるが、細かくみると、SZ02が庄内式併行期古段階、SZ03が庄内式併行期古段階～新段階、SZ01が庄内式併行期新段階という時期を想定できる。各方形周溝墓の構築に先後関係はあったとみられるが、大きな時間差はなく、同時期に墓域として認識され機能していた可能性が高いと考えられる。おおむね庄内式併行期古段階に築造が始まり、庄内式併行期新段階まで機能していたものと考えられる。

（4）方形周溝墓の構成

SZ02は10.5×9.6m、SZ03は推定9.4×9.1mと規模に近いが、SZ02の北西と南東の隅が陸橋部となるのに対し、SZ03は周溝が全周をめぐるという点で異なる。推定5×6.9mと規模の小さいSZ01は、少なくとも2箇所が陸橋部となるもので、SZ02からは若干離れている。全般的に周溝隅部が浅くなる傾向があり、周溝の共有はみられない。しかし、3基ともに主軸の方向は共通しており、列状に位置することは重要な点で、一群をなすものと考えられる。また、SD04からは、庄内式併行期古段階の土器が出土しているが、SD04と対応する溝が確認されていないため、周溝と断定することはできず、性格については不明である。またSZ03の北東には、SK03が位置し、方形周溝墓に付随する土壙墓の可能性が考えられる。

墓域の明確な範囲は不明瞭であり、東方の自然流路に面し、南北方向で列状に展開する可能性がある。ただし、溝の共有はみられず、群集するような墳墓の密度ではない。周辺に造墓の母体となるような集落は確認されておらず、これらの点については、今後の課題である。

（5）供献土器

周溝内における土器の出土状態について整理しておく。SZ01西溝出土土器は、墳丘上、あるいは周溝内に立て並べられていたものが、横倒しになったものと推定される。ただし、底面から少し高く、ある程度周溝に土が堆積した後に転倒したものであろう。SZ02北溝では、周溝の底に正位で置かれたような状態で、焼成後に底部が穿孔された可能性のある土器が出土した。SZ03東溝と北溝では、破片となった土器が周溝に落ち込んだ状態で出土した。このように、供献土器の出土状態は、各方形周溝墓によって異なる。

（6）埋葬施設

埋葬施設については、SZ01において埋葬施設の可能性があるSK02が検出されている。SZ03においてもSK06・07・08が検出されているが、その多くは不整形で、方形周溝墓に伴う

可能性は低いと考えられる。ただし、SK06については、長楕円形を呈し、その可能性が考えられる。SZ02東溝では、SK05が検出されており、周溝内埋葬の可能性がある。

参考文献

- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集
- 植田文雄 1988「古式土師器の編年」『斗西遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集
- 植田文雄 1993「古墳時代土器の検討」『斗西遺跡（2次調査）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集
- 植田文雄 1994「湖東北域の近江系について」『庄内式土器研究』Ⅵ 庄内式土器研究会
- 黒坂秀樹 2010「近江における外来系土器に関する素描（上）—畿内庄内式併行期前後の近江北部の甕形土器を主として—」『高月南遺跡Ⅰ』高月町埋蔵文化財調査報告書 高月町教育委員会・長浜市教育委員会
- 小竹森直子 1988「近江の地域色の再検討—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—」『紀要』第1号 滋賀県文化財保護協会
- 近藤 広 2001「弥生後期における受口状口縁土器の様相—近江の地域区分と他地域への影響—」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会
- 佐原 真 1960「先史時代」『彦根市史』上冊 彦根市役所
- 寺澤 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会
- 中居和志 2010「古墳出現前後の近江地域—土器編年を中心に—」『立命館大学考古学論集Ⅴ』立命館大学考古学論集刊行会
- 中西常雄 1979『北大津の変貌—弥生時代から古墳時代へ—』
- 中西常雄 1985「近江における甕形土器の動向—庄内期を中心として—」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会
- 伴野幸一 2000「湖南地域における弥生集落の動向—野洲川流域の弥生時代中期後半から後期の集落をめぐって—」『みずほ』第33号 大和弥生文化の会
- 伴野幸一 2001「下長遺跡出土土器の編年的位置」『下長遺跡発掘調査報告書Ⅸ』守山市文化財調査報告書
- 伴野幸一 2006「近江地域—野洲川流域を中心に—」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 藤井 整 2009「方形周溝墓調査の課題と方法」『みずほ』第41号 大和弥生文化の会
- 宮崎幹也 1994a「北近江の土器様相」『庄内式土器研究』Ⅵ 庄内式土器研究会
- 宮崎幹也 1994b「黒田遺跡を取り巻く土器編年」『黒田遺跡3』近江町文化財調査報告書第17集 近江町教育委員会
- 用田政晴 1985「近江における弥生時代後期後葉の土器群—その再検討—」『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-3』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会

2 芹川・犬上川流域における下沢遺跡の位置

(1) はじめに

下沢遺跡では、芹川流域において初例となる弥生時代終末期～古墳時代初頭（庄内式併行期）の方形周溝墓域が確認された。ここでは、犬上川流域における当該期の方形周溝墓域の調査事例を紹介し、下沢遺跡の方形周溝墓域とあわせて比較検討してみたい。

(2) 犬上川右岸の方形周溝墓域

福満遺跡（図24・25） 福満遺跡は、西今町と小泉町にまたがり、犬上川右岸の氾濫平野の微高地に立地する遺跡で、縄文時代後期～中世の複合遺跡である。1988年7月～9月にかけて5次調査が行われ、古墳時代初頭のものと思われる方形周溝墓2基が検出された（彦根市教育委員会2008）。

1号方形周溝墓は、東西8.4m、南北8.4m、面積70.6㎡である。周溝の最大幅は1.4mで、深さは0.6mである。2号方形周溝墓は、東西8.0m、南北推定8.0m、推定面積64㎡である。周溝の最大幅は、1.0mで、深さは0.5mである。1号方形周溝墓は、周溝が全周するもので、2号方形周溝墓もその可能性がある。両者ともに規模が近く、周辺では他の方形周溝墓は検出されていない。

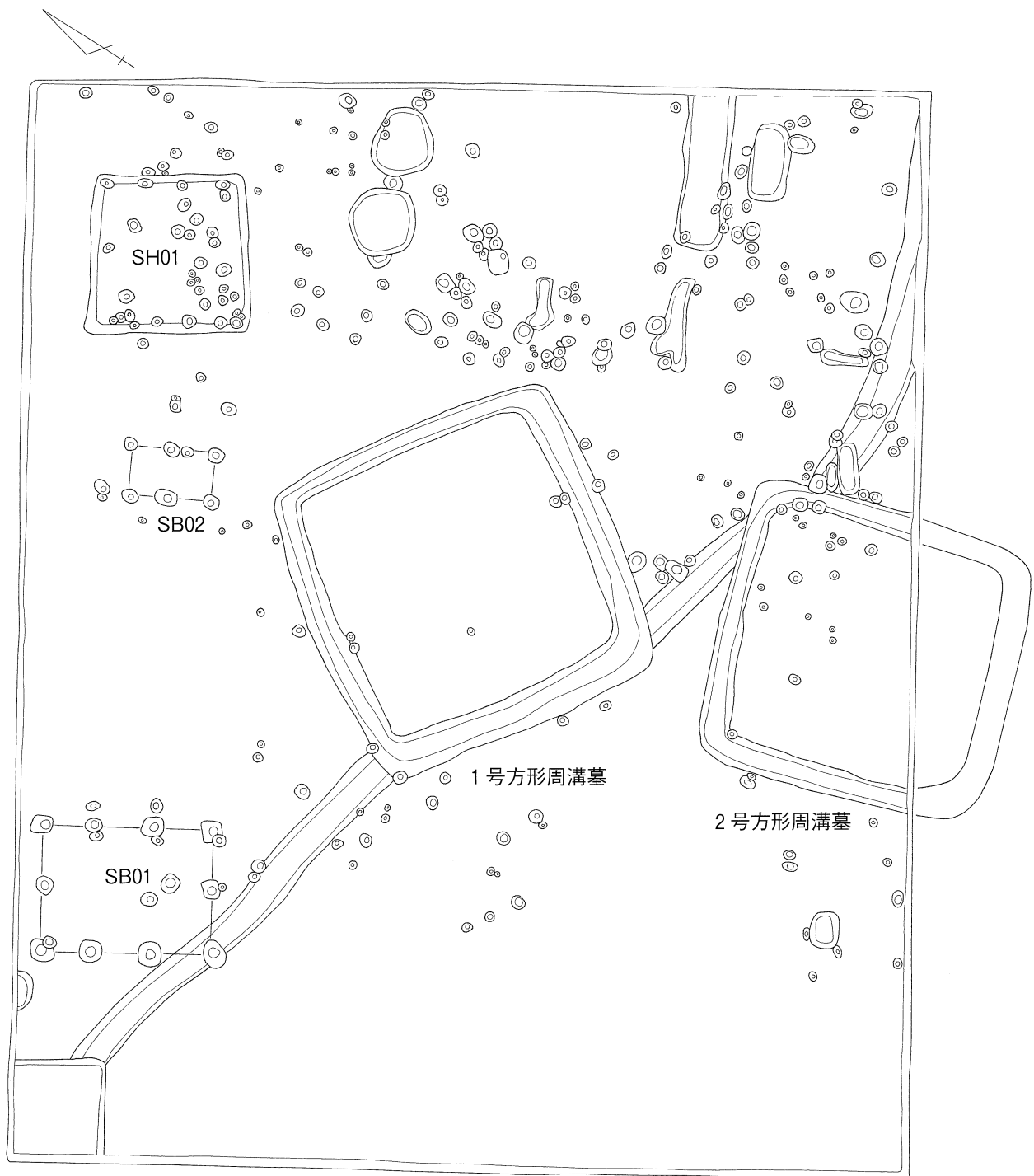
また、1993年7月～8月にかけて行われた8次調査では、古墳時代初頭のものと思われる方形周溝墓1基が検出されている（彦根市教育委員会2008）。東西推定9.4m、南北推定10.0m、推定面積94.0㎡である。周溝の最大幅は2.0mで、深さ0.2mである。周溝は全周をめぐる可能性がある。

品井戸遺跡（図27） 品井戸遺跡は、犬上川右岸の氾濫平野の微高地に立地する遺跡である。弥生時代後期～中世の複合遺跡で、福満遺跡に隣接する。1980年10月～12月にかけて行われた市道建設にともなう2次調査では、方形周溝墓1基が確認された（彦根市教育委員会1985・2008）。東西13.2m、南北推定13.0m、推定面積171.6㎡と規模が大きいものである。周溝の最大幅は、4.4m、深さ1.0mである。

北側の周溝から、短頸壺（図28）が出土した。口縁部外面に直線文を、肩部に上から直線文、綾杉状の刺突文、波状文をもつ。外面はハケ調整ののちナデ調整で、内面はナデ調整である。器高30.3cm、口径12.0cm、胴径28.5cm、底径5.6cmである。底部は上げ底ではない。外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい橙色である。庄内式併行期古段階に相当する。

(3) 犬上川左岸の方形周溝墓域

神ノ木遺跡（図26） 神ノ木遺跡は、金剛寺町の犬上川と宇曾川の形成した扇状地の先端部に立地する。ほ場整備に伴い1996年11月～1997年3月にかけて行われた彦根市教育委員会による発掘調査において、方形周溝墓1基が検出された（彦根市教育委員会1997）。東西推定6.8m、南北推定6.6m、推定面積44.9㎡である。周溝の最大幅は1.2mで、深さ0.1mである。周溝からは、遺物がほとんど出土していないが、古墳時代初頭前後のものと推定される。また、1996年7月～11月にかけて滋賀県教育委員会によって行われた発掘調査において、方



福満遺跡5次

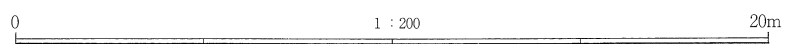


図24 犬上川流域の方形周溝墓域（1）

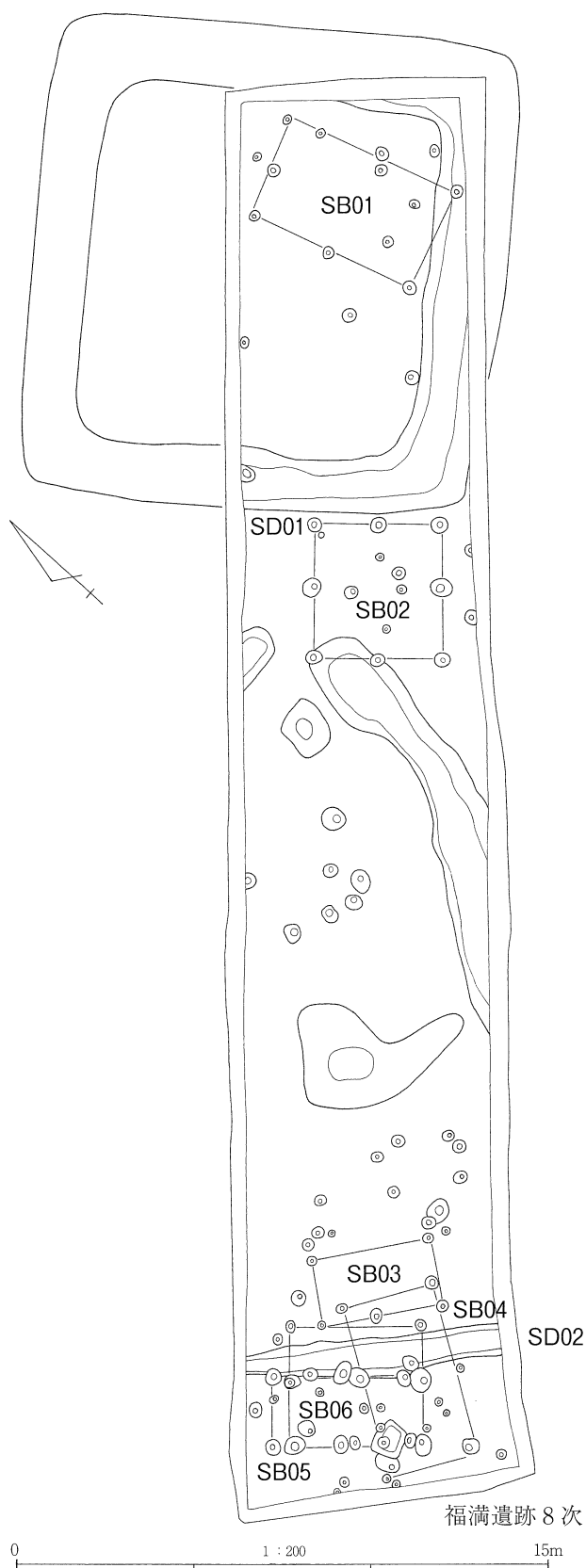


図25 犬上川流域の方形周溝墓域（2）

形周溝墓の可能性が高い遺構が確認されている（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会1999）。隅の部分のみ検出されており、一辺5m程度の小規模なものであろう。溝の最大幅は80cmで、深さ0.2mである。溝から遺物は出土していないが、弥生時代終末期とされる。

堀南遺跡（図27） 堀南遺跡は、神ノ木遺跡の北側に接し、犬上川左岸の扇状地先端部の微高地に立地する遺跡である。団地造成に伴い1986年2月～3月にかけて行われた発掘調査において、方形周溝墓3基が検出された（彦根市教育委員会1992）。

1号方形周溝墓は、東西推定4.0m、南北推定4.4m、推定面積17.6㎡である。周溝の最大幅は80cmで、深さ0.5mである。

広口壺（図29）が、周溝から出土した。口縁部外面はナナメのハケ調整の後、ナデ調整である。口縁部内面は、ハケ調整ののち、ナデ調整である。胴部外面は、上部がナナメハケ調整、胴部最大径の位置付近が横ミガキである。胴部内面は、上半がナナメハケ調整で、底部から胴部下方もハケ調整である。胴部下方に厚い部分があり、継ぎ目となっている。器高26.5cm、口径14.7cm、胴径26.0cm、底径5.8cmである。内外面の色調は、明黄褐色である。胎土は緻密で、1～2mmの砂粒を含む。庄内式併行期新段階～布留式併行期古

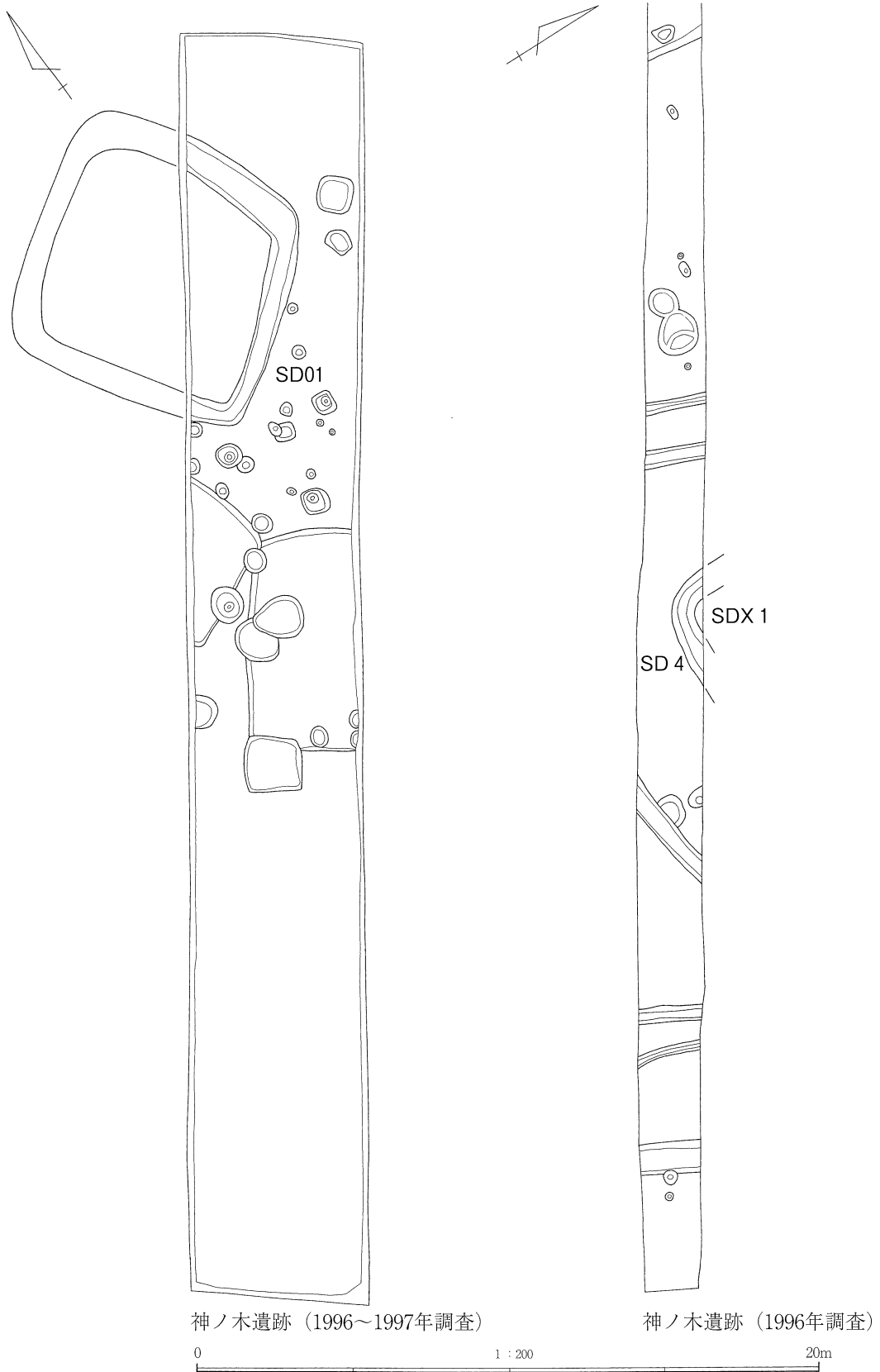
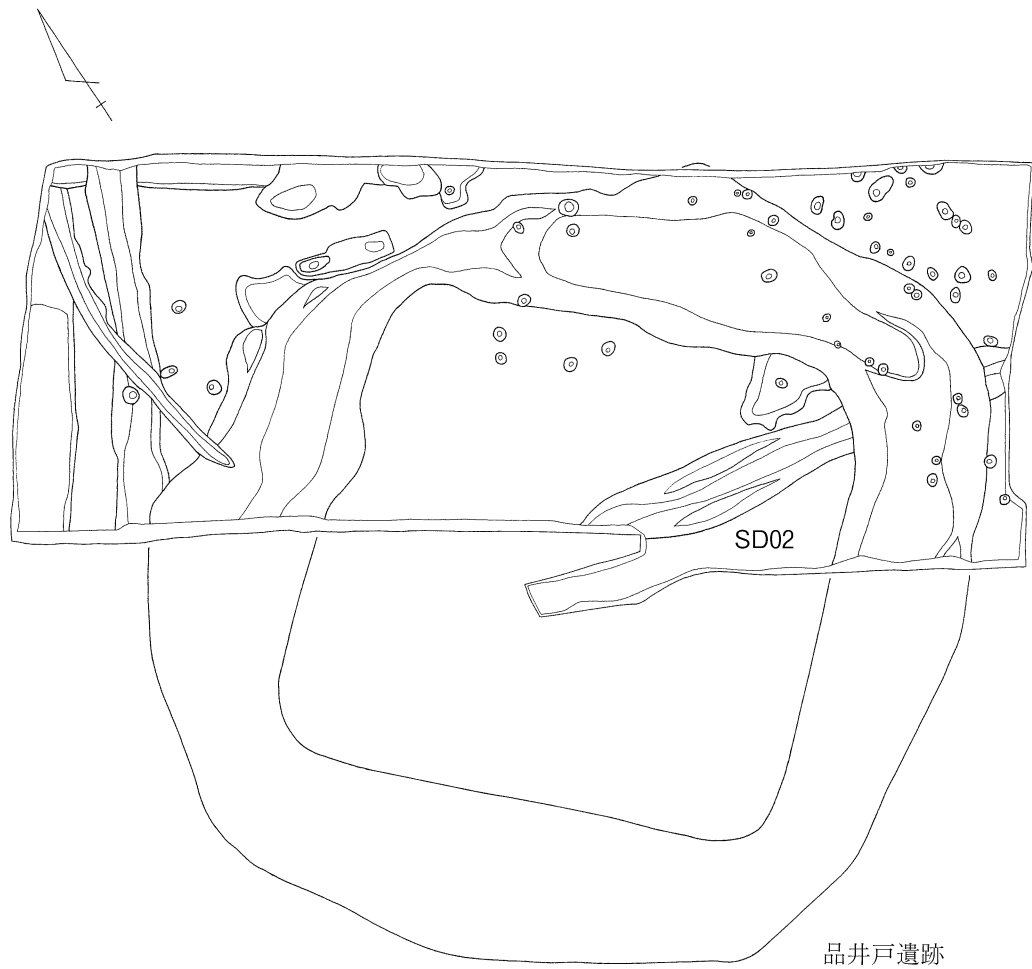
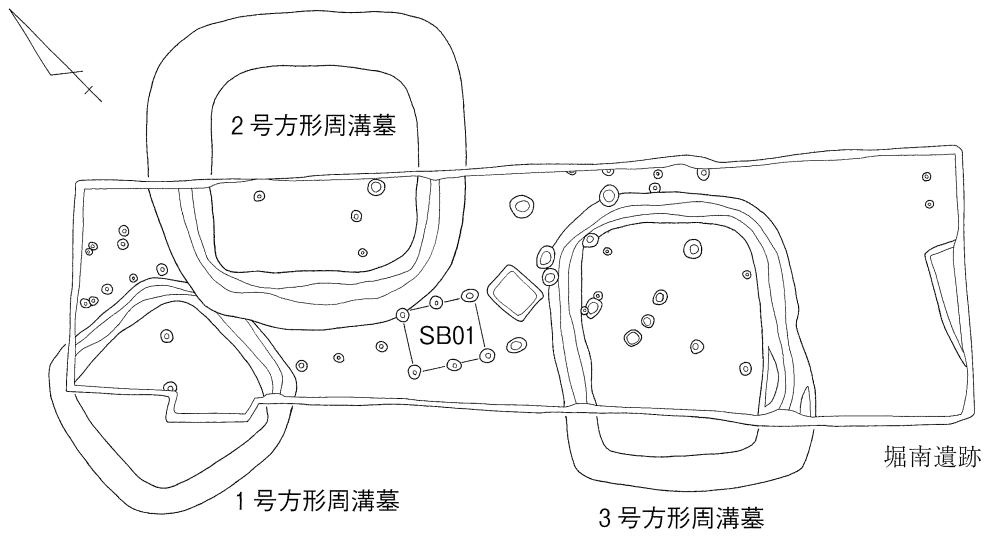


図26 犬上川流域の方形周溝墓域 (3)



0 1 : 200 20m

図27 犬上川流域の方形周溝墓域（4）

段階に下る可能性がある。

2号方形周溝墓は、東西5.6m、南北推定5.6m、推定面積31.4㎡である。周溝の最大幅は1.6mで、深さ0.7mである。壺、高坏、器台、鉢（図30）が、周溝から出土した。特徴的な出土状況を示しており、東溝の底面で出土した大型鉢（6）の中には、脚のない高坏（3）と器台（5）が入れ子になっていたという（彦根市教育委員会1992）。

1は、加飾されたパレススタイル系の広口壺である。口径は推定22.5cmである。口縁端部外面に4条の擬凹線文があり、棒状浮

文をもつ。口縁部内面には刺突も施される。肩部には、上から、直線文と刺突文が交互に施される。最も下の刺突文の上のみが、横ハケ調整である。口縁端部外面と胴部には暗赤褐色の赤色顔料が塗布される。外面が黄橙色で、内面は浅黄橙色である。胎土は緻密である。

2は、口縁部を欠くが、細頸壺の可能性はある。残存高10.9cm、胴径16.2cm、底径3.7cmで、斜格子文、沈線、波状文をもつ。胴部下半はハケ調整である。底部は薄めで、上げ底となる。黄褐色で、胎土は緻密である。

3は、高坏の坏部である。残存高11.2cm、坏部口径24.9cmである。摩滅のため、内外面の調整は不明である。

4は、高坏で、器高13.1cm、坏部口径18.0cm、脚底径12.0cmである。坏部の調整は、外面の稜を挟んで上は縦ミガキ、下は縦ミガキと横ミガキである。内面は縦ミガキである。脚の外面は縦ミガキである。脚には透かしを三方にもつ。坏部と脚部ともに端部に明瞭な面をもたない。にぶい黄橙色で、胎土は緻密である。

5は、器台である。器高9.6cm、口径12.1cm、脚底径10.3cmである。調整は、受部、脚部ともに外面は縦ミガキである。受部端部にはナデ調整が施される。受部の内面は、縦ミガキである。脚部内面は、上部が斜めハケ、下部がハケのちナデ調整である。脚には透かしを三方にもつ。にぶい黄橙色で、胎土は緻密である。

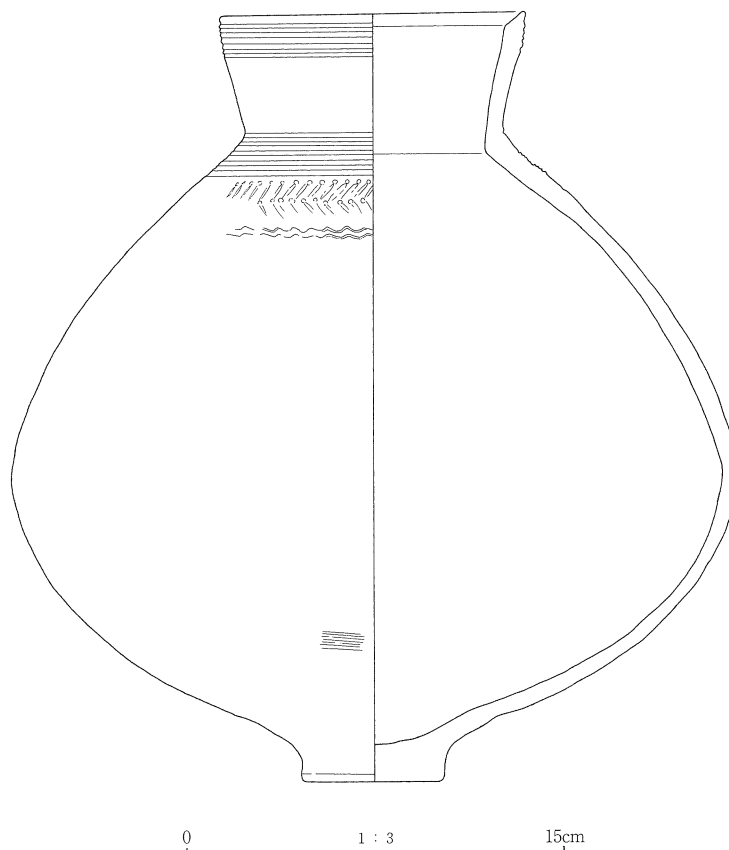


図28 品井戸遺跡方形周溝墓出土土器

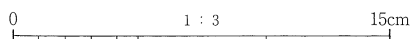
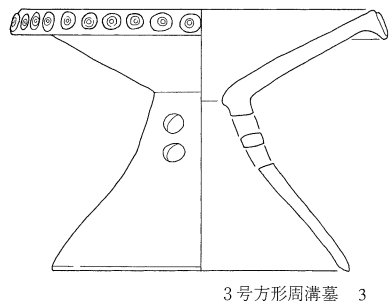
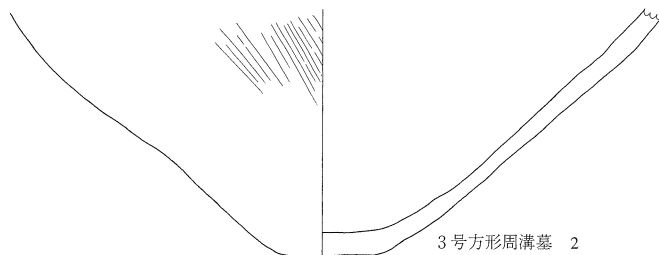


図29 堀南遺跡1号・3号方形周溝墓出土土器

6は、大型鉢である。器高18.6cm、口径30.5cm、底径5.7cmである。明黄褐色で、胎土は密である。内外面の調整は、摩滅のために不明である。内面はヘラナデとハケ調整がわずかにみられる。

6の大型鉢は類例に乏しいが、1～6は、おおむね庄内式併行期新段階に相当する。

3号方形周溝墓は、東西4.8m、南北推定6.4m、推定面積30.7㎡である。周溝の最大幅は1.4mで、深さ0.6mである。

壺と器台（図29）が、周溝から出土した。2号方形周溝墓と3号方形周溝墓の方位は共通している。

2は、壺の底部である。外面にはハケ調整がみられ、内面の調整は摩滅のため不明である。底部は尖りぎみとなる。底径4.1cmである。色調は、外面がにぶい黄褐色、内面がにぶい橙色である。胎土は緻密で、若干の砂粒を含む。3は、器台である。受部口縁外面には円形浮文が配される。内外面の調整は、摩滅のため不明である。完形で、器高10.3cm、口径13.8cm、脚底径11.6cmである。上下に並ぶ透かしを三方にもつ。明黄褐色で、胎土は密である。2と3は、庄内式併行期新段階に相当するものである。周溝出土土器から

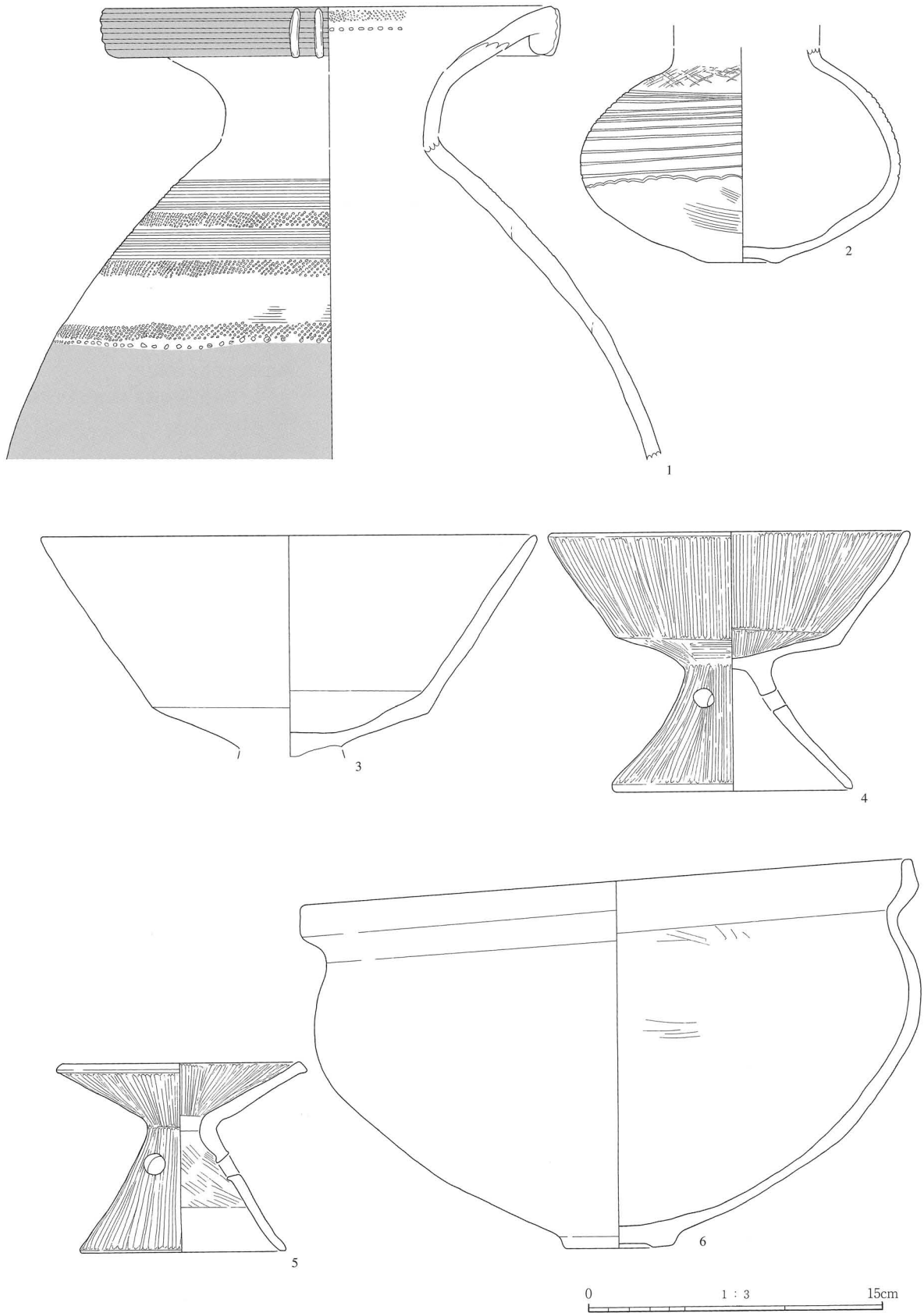


图30 堀南遺跡 2号方形周溝墓出土土器

表1 芹川・犬上川流域の方形周溝墓

遺跡名	遺構番号	長さ	面積	時期	文献
下沢遺跡	SZ01	(5.0)×(6.9)m	(35㎡)	庄内式併行期新段階	彦根市教育委員会2012
下沢遺跡	SZ02	10.5×9.6m	100.8㎡	庄内式併行期新段階	彦根市教育委員会2012
下沢遺跡	SZ03	(9.4)×(9.1)m	(86㎡)	庄内式併行期古段階～新段階	彦根市教育委員会2012
福満遺跡5次	1号方形周溝墓	8.4×8.4m	70.6㎡	庄内式併行期の可能性	彦根市教育委員会2008・彦根市教育委員会2012
福満遺跡5次	2号方形周溝墓	8.0×(8.0)m	(64㎡)	庄内式併行期の可能性	彦根市教育委員会2008・彦根市教育委員会2012
福満遺跡8次	SD01	(9.4)×(10)m	(94㎡)	庄内式併行期の可能性	彦根市教育委員会2008・彦根市教育委員会2012
品井戸遺跡2次	方形周溝墓	13.2×(13.0)m	(171.6㎡)	庄内式併行期古段階	彦根市教育委員会1985・彦根市教育委員会2008・彦根市教育委員会2012
堀南遺跡	1号方形周溝墓	(4.0)×(4.4)m	(17.6㎡)	庄内式併行期新段階～ 布留式併行期古段階	彦根市教育委員会1992・彦根市教育委員会2012
堀南遺跡	2号方形周溝墓	5.6×(5.6)m	(31.4㎡)	庄内式併行期新段階	彦根市教育委員会1992・彦根市教育委員会2012
堀南遺跡	3号方形周溝墓	4.8×(6.4)m	(30.7㎡)	庄内式併行期新段階	彦根市教育委員会1992・彦根市教育委員会2012
神ノ木遺跡	SD-5-1	(6.8)×(6.6)m	(44.9㎡)	庄内式併行期の可能性	彦根市教育委員会1997
神ノ木遺跡	SDX 1	—	—	庄内式併行期の可能性	滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1997

()は推定値

[文献]

- 彦根市教育委員会 1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡(第4次)』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集
 彦根市教育委員会 1992『堀南遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第22集
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1997『堀南遺跡・神ノ木遺跡』県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書XⅢ-3
 彦根市教育委員会 1997『神ノ木遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第30集
 彦根市教育委員会 2008『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集
 彦根市教育委員会 2012『下沢遺跡I』彦根市埋蔵文化財調査報告書第51集(本書)

みると、1号方形周溝墓は、布留式古段階まで及ぶ可能性があるものの、その他の方形周溝墓は、ほぼ庄内式併行期新段階に位置するものである。

(4) 方形周溝墓の諸特徴

犬上川流域の方形周溝墓域をみると、福満遺跡では、周溝から明確な時期を示す土器が出土していないが、4次調査で庄内式併行期の竪穴建物1軒が確認され(彦根市教育委員会1987)、10次調査では自然流路から多数の庄内式併行期の土器が出土しており(彦根市教育委員会2008)、こうした周辺の遺構の時期や出土土器から、庄内式併行期のものである可能性は高いと考えられる。神ノ木遺跡においても、周溝からは明確な時期を示す土器は出土していないが、隣接する堀南遺跡の状況や周辺の遺構から、おおむね庄内式併行期のものと推定される。その他、品井戸遺跡2次調査の方形周溝墓は庄内式併行期古段階に、堀南遺跡の方形周溝墓は庄内式併行期新段階～布留式併行期古段階に位置するものである。芹川流域の下沢遺跡の方形周溝墓が庄内式併行期古段階～新段階のものであることから、芹川・犬上川流域において現状で確認されている方形周溝墓は、いずれも庄内式併行期以降に位置するものであることがわかる。

次に、平面形態をみると、周溝が全周をめぐるものとして、福満遺跡5次調査1号、下沢遺跡SZ03が知られる。また、その可能性が高いものに、福満遺跡5次調査2号、福満遺跡8次調査、神ノ木遺跡1996～1997年調査SD1、神ノ木遺跡1997年調査SDX1、堀南遺跡1号・2号・3号、品井戸遺跡2次の諸例がある。一辺の隅の部分が陸橋部となるものは、下

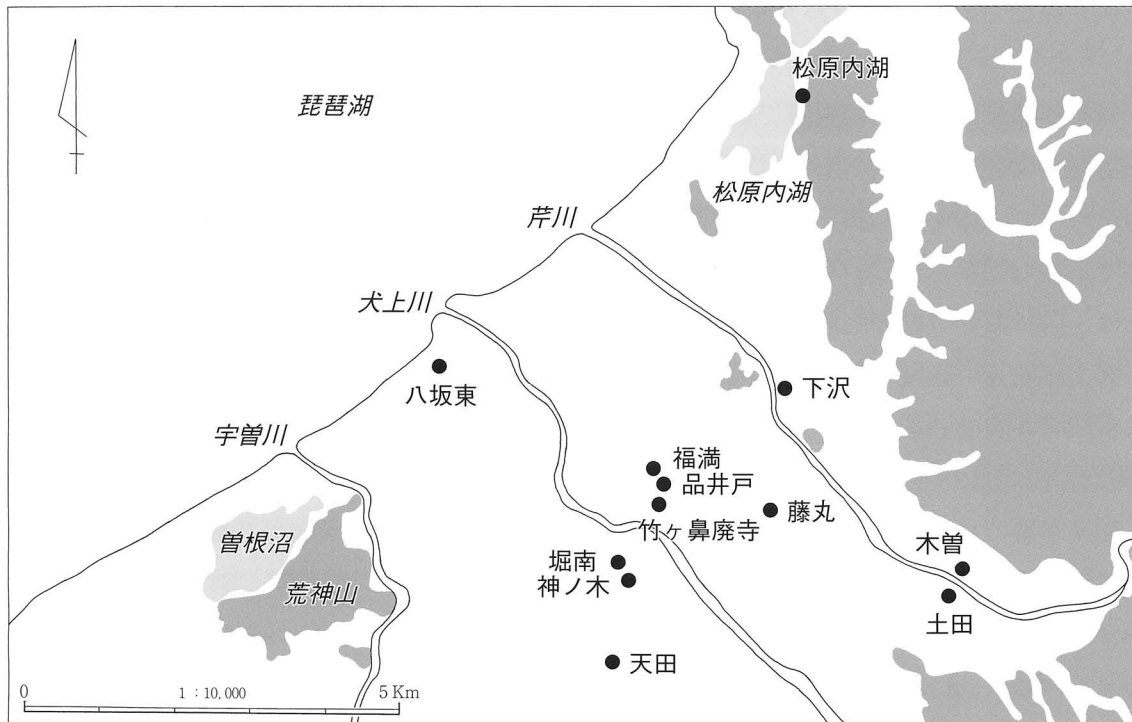


図31 芹川・犬上川流域における弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺跡

沢遺跡 SZ01・02が知られ、SZ02は、2ヶ所が陸橋部となり、SZ01は、4ヶ所が陸橋部になるものと推定される。現状では、隅に陸橋部を有する方形周溝墓は、犬上川流域では確認されておらず、芹川流域においてのみ確認できる。

方形周溝墓の規模では、品井戸遺跡2次調査例が一辺13mを超え、171.6㎡と最大である。次いで、下沢遺跡 SZ02・03、福満遺跡5次調査1号・2号、福満遺跡8次調査例が一辺10m前後で、約60～100㎡と中型で、下沢遺跡 SZ01、堀南遺跡1号・2号・3号、神ノ木遺跡の諸例が50㎡以下の小型となる。周溝の幅では、福満遺跡8次調査、下沢遺跡 SZ02・SZ03、品井戸遺跡2次調査の諸例が2mを越え、その他の大半は1m前後であり、平面積とほぼ比例する。規模のうえでは、品井戸遺跡、福満遺跡、下沢遺跡で比較的大型のものがみられ、注目できる。

(5) 方形周溝墓域と集落

方形周溝墓域と集落の関係についても言及しておきたい。

芹川流域 確認されている遺跡は少なく、琵琶湖湖岸に近い松原内湖遺跡、下沢遺跡と扇状地上の木曾遺跡、土田遺跡があげられる。木曾遺跡では、庄内式併行期の竪穴建物10軒、布留式併行期古段階の竪穴建物1軒が検出されている（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会1999a）。庄内式併行期の竪穴建物からは、S字甕A類、北陸系土器が出土し、布留式併行期の竪穴建物からは、珠文鏡の破鏡が出土している点に注目できる。土田遺跡においても庄内式併行期～布留式古段階の土器が出土している（多賀町教育委員会2004）。芹川の扇状地においては、木曾遺跡が中心的集落であるとみられるが、

墓域が確認された下沢遺跡からは3 km 余りとやや離れており、両者の関係は明瞭ではない。

琵琶湖湖岸の松原内湖遺跡では、包含層から多数の土器が出土している（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会1993）。弥生時代後期～庄内式併行期を中心に土器が多数出土し、外来系土器の多い点をふまえると、交易の拠点となりうる集落であったとみられる。布留式併行期古段階まで下る土器も出土している。なお、包含層からは、舌に転用されたとみられる銅鏃と約40cm 離れた位置で小銅鐸が出土している。

犬上川右岸 遺跡の密度が比較的濃く、庄内式併行期に営まれたと考えられる福満遺跡（彦根市教育委員会1987・2008）、品井戸遺跡（彦根市教育委員会1981）、竹ヶ鼻廃寺遺跡（彦根市教育委員会1985）がまとまっている。

福満遺跡では、4次調査において庄内式併行期の竪穴建物1軒が検出され、10次調査では、自然流路から当該期の土器が多数出土している。品井戸遺跡1次調査においても当該期の土器が出土し、付近に居住域が存在する可能性は高い。また、これらの調査区の近くに位置する5次調査区、8次調査区及び品井戸遺跡2次調査区では、方形周溝墓域が確認されており、居住域と墓域が近接している状況がみられる。福満遺跡と品井戸遺跡における居住域と墓域の範囲、詳細な位置関係などは今後の検討課題であるが、居住域と墓域が一体となって遺跡群を形成している様子がかがわれる。東海系と北陸系を中心とした外来系土器が多く出土している点も留意される。

これらの遺跡からやや東の扇状地先端部では、藤丸遺跡があり、庄内式併行期新段階～布留式併行期古段階の土器が出土している（彦根市教育委員会2005）。

犬上川左岸 福満遺跡、品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡の対岸に位置する堀南遺跡、神ノ木遺跡では、方形周溝墓域が検出され、このうち、堀南遺跡では、庄内式併行期の土器が包含層から出土していることから（彦根市教育委員会1992）、墓域だけでなく、居住域も存在する可能性が高い。これらの遺跡から南の天田遺跡においても当該期の土器が出土している（彦根市教育委員会2004）。また、琵琶湖湖岸の八坂東遺跡においても、当該期の土器が若干出土している（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会1995）。

このように、現在のところ、墓域と居住域が近接して確認される遺跡としては、犬上川右岸の福満遺跡・品井戸遺跡、同左岸の堀南遺跡が知られ、それぞれ犬上川の両岸において核となっていた拠点集落であると考えられる。このほかに、周辺で墓域は確認されていないが、琵琶湖湖岸の松原内湖遺跡、芹川扇状地の木曾遺跡も拠点集落とみられる。拠点集落の間には物資流通による相互関係があったものと推測され、集落間相互の関係にも留意していく必要がある。

(6) 結 語

最後に、近江の弥生時代後期以降の方形周溝墓の様相と比較しつつ、下沢遺跡を含めた当該地域の様相を整理しておきたい。弥生時代後期になると、方形周溝墓が2列に設定される構造は少なく、溝をあまり共有しなくなり、また、規模の大きな方形周溝墓の周囲に小規模な方形周溝墓が隣接する傾向がある。なかでも、注目すべき点としては、溝の一辺の中央部に陸橋部をつくる、あるいはその開口部の溝幅を拡張する後の前方後方形周溝墓の祖形となるタイプが、栗東市坊袋遺跡、旧能登川町柿堂遺跡などで遅くとも後期前葉に出現することである。後期後葉から庄内式併行期には、野洲市富波遺跡、守山市益須寺遺跡、旧近江町法勝寺遺跡などの明確な前方後方形周溝墓が出現し、庄内式併行期には、長浜市鴨田遺跡、旧虎姫町五村遺跡の張り出し付き円形周溝墓や旧能登川町神郷亀塚古墳、旧高月町小松古墳の前方後方墳が出現する。

このように、方形周溝墓に加え、弥生時代後期には前方後方形周溝墓が築かれ、さらに円形あるいは前方後円形周溝墓という弥生時代の伝統にはみられなかった新たな墳形が出現する過程が明らかになっている。こうした墳墓の変遷は、共有する墓域を持ち、等質性の高い墳墓を築いてきた集団が、墳形や規模、墓域などに表現される階層性を持ち始め、その中から特定の人物が共同の墓地から分離し、独立していく過程を示すものと考えられている(田中1997)。

一方で、芹川・犬上川流域においては、庄内式併行期の方形周溝墓は確認されているが、新たな墳形である前方後方形周溝墓や円形周溝墓は確認されていない。今後、他の墳形を採用した墳墓が確認される可能性も残されているが、現状では、芹川・犬上川流域の庄内式併行期の墳墓は、方形周溝墓が基本であるといえる。方形周溝墓という伝統的な規制の枠を超えず、共同体的紐帯をある程度保持していたとみられる。ただし、福満遺跡や品井戸遺跡のように、一辺10m前後～13m程度の方形周溝墓が群集せず、1～2基独立して造墓されるものもあり、伝統的な墳形を維持しつつも、その中から、階層性をもった特定の個人や集団が、共同の墓地から分離独立しつつある状況がうかがわれ、一定の階層化が進んでいると考えられる。下沢遺跡においても、一辺10m前後の方形周溝墓2基が並列しており、限られた個人や集団が葬られたと考えられる。下沢遺跡 SZ01・02のように隅が陸橋部となる方形周溝墓は、濃尾平野をはじめとした東海地方で弥生時代中期から多くみられ(赤塚2005)、周辺では旧能登川町中沢遺跡(東近江市教育委員会2007)や旧近江町法勝寺遺跡(近江町教育委員会1990)などで庄内式併行期のものが確認されている。下沢遺跡の方形周溝墓と出土土器は、東海地方との関係性を色濃く示し、庄内式併行期においては、各遺跡出土土器に東海や北陸からの影響が強くみられる。濃尾平野をはじめとした東海地方との関係を含め、時間軸に沿って近江の墳墓について再検討する必要があるだろう。そのためにも、当該期の土器編年の検証作業は必須であり、下沢遺跡の方形周溝墓域を造営した集落の検討や周辺の調査も含めて課題は多い。

参考文献

- 赤塚次郎 2005「東海の方形周溝墓と前方後方墳」『季刊考古学』第92号 雄山閣
- 植田文雄 2000「近江・湖東地域の弥生集落」『みずほ』第33号 大和弥生文化の会
- 近江町教育委員会 1990『法勝寺遺跡』近江町文化財調査報告書第17集
- 大橋信弥 1985「近江における方形周溝墓の発生と展開」『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 黒坂秀樹 2006「近江の出現期古墳—湖北地域を中心として—」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 鈴木 元 2002「美濃の弥生墓制」『美濃の考古学』第5号 美濃の考古学刊行会
- 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 1993『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995『八坂東遺跡』（仮称）滋賀県立大学整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999a『木曾遺跡Ⅲ』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書26-1
- 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999b『堀南遺跡・神ノ木遺跡』県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告
- 多賀町教育委員会 2004『土田遺跡』多賀町埋蔵文化財調査報告書第15集
- 田中勝弘 1997「弥生の墓から古墳へ—近江の場合の三つの墳形と墳墓群構造—」『太邇波考古学論集』両丹考古学研究会
- 田中勝弘 2007「荒神山古墳と大和政権」『新修彦根市史第1巻通史編古代・中世』彦根市東近江市教育委員会 2007『中沢遺跡（15次）』東近江市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 彦根市教育委員会 1981『品井戸遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第2集
- 彦根市教育委員会 1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集
- 彦根市教育委員会 1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第13集
- 彦根市教育委員会 1992『堀南遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第22集
- 彦根市教育委員会 1997『神ノ木遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第30集
- 彦根市教育委員会 2004『天田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 彦根市教育委員会 2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集
- 彦根市教育委員会 2008『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 彦根市教育委員会 2010『荒神山古墳』彦根市文化財調査報告書第2集
- 宮下睦夫 1990「益須寺遺跡の前方後方型周溝墓について」『益須寺遺跡第15次発掘調査報告書』守山市文化財調査報告書第39冊

挿図出典

図26 1996～1997年調査遺構図：彦根市教育委員会1997を改変再トレース、1996年調査遺構図：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会1999bを改変再トレース

表2 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率 (%)	反転 図化	器径 幅 (cm)	器高 長さ (cm)	口径 厚さ (cm)	色調	その他
1	SX01	弥生土器	鉢	5	反			31.1	(外面) にぶい黄橙色 (内面) にぶい黄橙色	外面赤色顔料
2	SX01	弥生土器	壺	60	反	41.2			(内外面) 浅黄橙色	底径9.8
3	SX01	石器	剥片	100		1.9	1.8	0.15	暗灰色	サヌカイト
4	SD08	弥生土器	甕	5					(内外面) 灰褐色	
5	南西検出面	石器	磨石・敲石	70		6.5	11.1	4.7	灰白色	湖東流紋岩、490g
6	SZ01西溝	古式土師器	壺	60	反	22.7	21.8	12.8	(内外面) 浅黄橙色	
7	SZ02北溝	古式土師器	壺	40	反			14.4	(内外面) 灰白色	
8	SZ02西溝	古式土師器	甕	5	反				(外面) 黄灰色 (内面) 浅黄橙色	
9	SZ03東溝	古式土師器	壺	20	反			17	(外面) にぶい黄橙色 (内面) 明褐灰色	
10	SZ03東溝	古式土師器	甕	20	反			16.6	(内外面) 灰白色	
11	SZ03北溝	古式土師器	壺	20	反			13.8	(外面) 橙色 (内面) にぶい橙色	
12	SZ03北溝	古式土師器	壺	40	反			7.6	(外面) 明黄褐色 (内面) 浅黄橙色	
13	SZ03北溝	古式土師器	鉢	30	反	13.9	10.4	11	(内外面) 黄橙色	
14	SZ03北溝	古式土師器	高坏	40	反		24	29	(内外面) にぶい黄橙色	脚高11.8、脚底径17.7cm
15	SZ03北溝	古式土師器	高坏	30					(外面) にぶい橙色 (内面) 橙色	脚底径14.8
16	SZ03北溝	古式土師器	高坏	10	反				(内外面) 橙色	
17	SZ03北溝	古式土師器	高坏	10	反				(内外面) 浅黄橙色	脚底径15
18	SZ03北溝	古式土師器	高坏	10	反				(内外面) にぶい橙色	脚底径16.4
19	SZ03北溝	古式土師器	器台	60	反		14.1	19	(内外面) 橙色	底径15.0
20	南西検出面	古式土師器	甕	5	反			14	(内外面) 灰白色	
21	SD04	古式土師器	甕	5	反			13	(内外面) 灰白色	
22	落ち込み	須恵器	坏	20	反				青灰色	底径7.0
23	落ち込み	須恵器	坏	20	反				明青灰色	底径6.9
24	落ち込み	灰釉陶器	碗	40	反				灰白色	底径7.4
25	落ち込み	灰釉陶器	碗	30					灰白色	底径6.5
26	落ち込み	灰釉陶器	碗	10	反				灰白色	底径6.5
27	落ち込み	土師器	皿	20	反		1.2	7.6	褐灰色	
28	落ち込み	土師器	皿	20	反		1.4	8	(外面) 浅黄橙色 (内面) にぶい黄橙色	
29	南西検出面	土師器	長胴甕	20	反			31	灰白色	
30	SD08	須恵器	短頸壺	20	反			11.3	青灰色	
31	4層	須恵器	坏	10	反			13	灰白色	
32	4層	須恵器	長頸壺	5	反				灰黄褐色	底径13.7
33	SD08	土師器	皿	40	反				灰白色	底径12.0
34	4層	土師器	皿	20	反			14	(外面) 橙色 (内面) 浅黄橙色	
35	4層	磁器	碗	5	反			16	明緑灰色	
36	4層	陶器	摺鉢	5	反				黒色	底径14.8

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

図版 1



1 調査前風景（西から）



2 調査前風景（北から）



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（北東から）

図版 3



1 調査状況（北から）



2 SX01土器棺墓（東から）



1 SZ01方形周溝墓（西から）



2 SZ01西溝土器出土状態（南から）



3 SZ01西溝土層断面（南から）

図版 5



1 SZ02方形周溝墓（北から）



2 SZ02北溝土器出土状態（南から）



3 SZ02北溝土層断面（西から）



1 SZ03方形周溝墓（北東から）

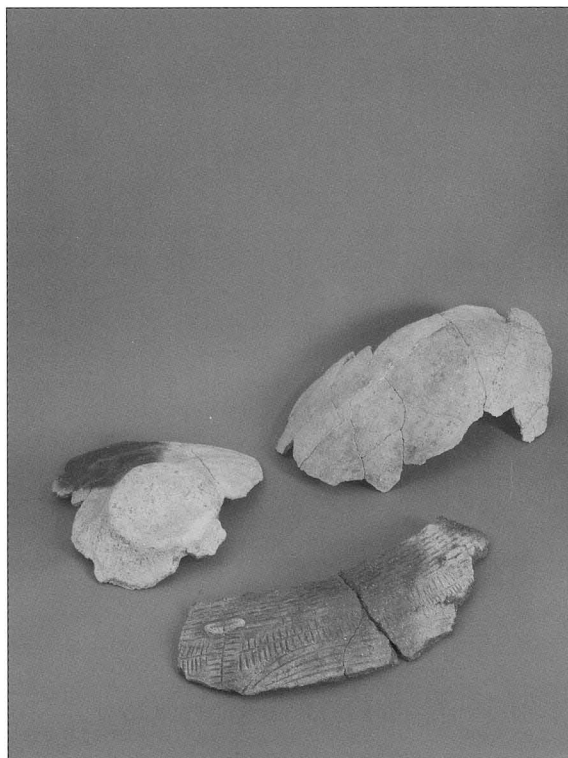


2 SZ03東溝土器出土状態（南から）

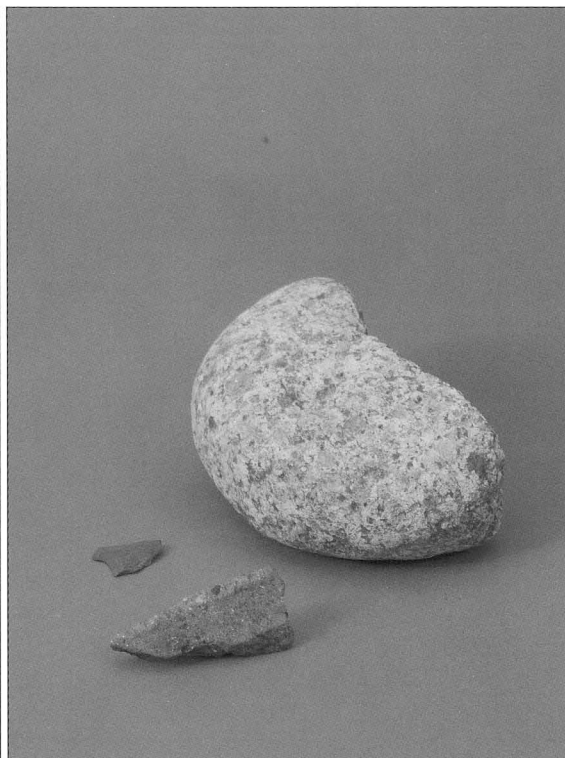


3 SZ03北溝土器出土状態（南から）

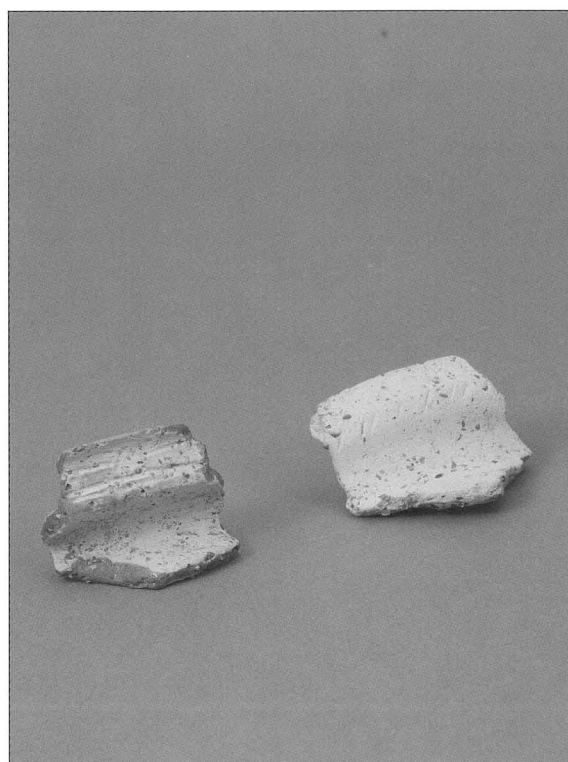
図版 7



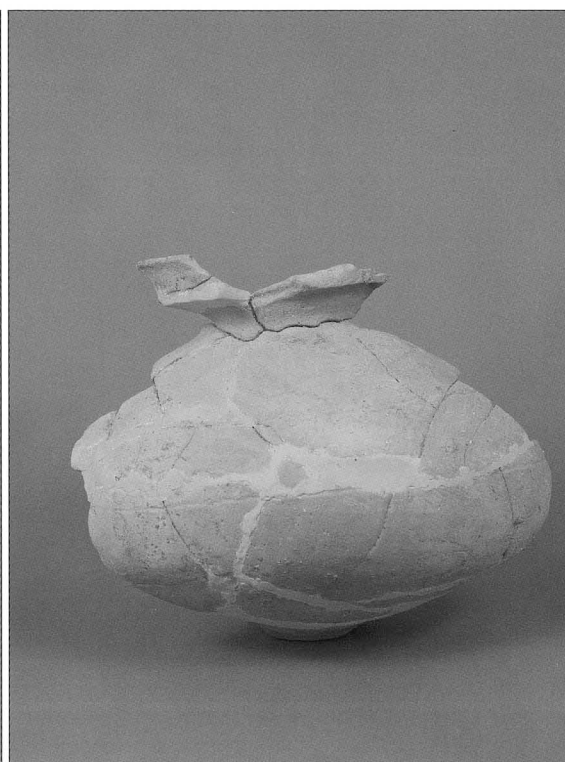
1 SX01土器棺



2 弥生時代前期出土遺物



3 SD04・検出面出土土器



4 SZ01西溝出土土器

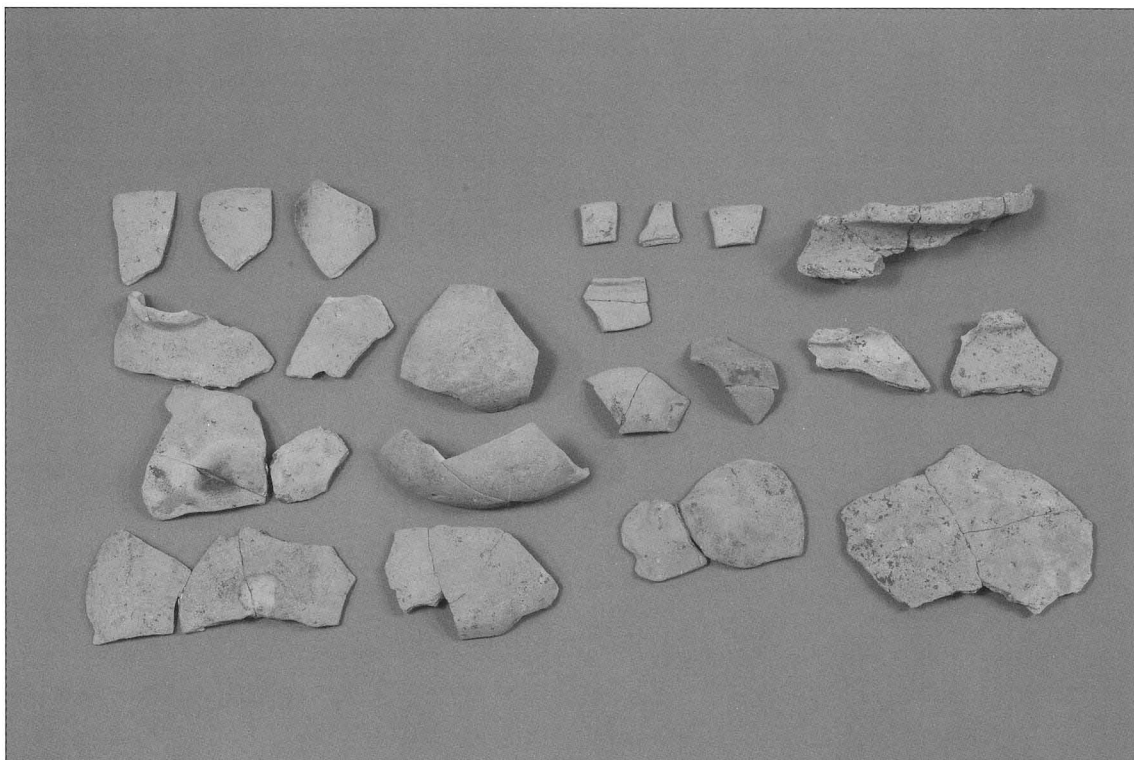


1 SZ02北溝・西溝出土土器



2 SZ03東溝出土土器

図版 9



1 SZ03北溝出土壺・鉢



2 SZ03北溝出土高坏・器台

報告書抄録

ふりがな	しもぞわいせき 1							
書名	下沢遺跡 I							
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	51							
編著者名	戸塚洋輔							
編集機関	彦根市教育委員会文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町 1 番38号 TEL0749-26-5833							
発行年月日	20120331							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
しもぞわいせき 下沢遺跡	ひこねし 彦根市 にしのみ 西沼波 ちょう 町	25202	44	35度 15分 26秒	136度 15分 44秒	430㎡	20110426 ～ 20110630	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下沢遺跡	集落	弥生時代前期 弥生時代終末期～古墳時代 初頭 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	土器棺墓 方形周溝墓 掘立柱建物	弥生土器 石器 古式土師器 土師器 須恵器 灰釉陶器	芹川流域における弥生時代終末期～古墳時代初頭の方形周溝墓域			

彦根市埋蔵文化財調査報告書第51集

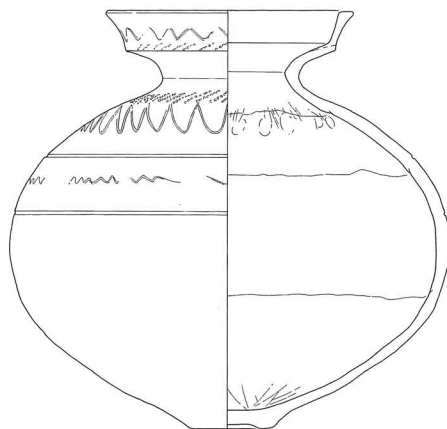
下沢遺跡 I

—宅地造成工事に伴う発掘調査—
平成24年（2012年）3月31日発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
滋賀県彦根市尾末町 1 番38号
TEL0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社
岐阜県岐阜市七軒町15番地
TEL058-263-4101

SHIMOZAWA SITE



March, 2012

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division